特攻会報

平成9年2月

第30号

〒105 東京都港区虎ノ門3—6—8 第6森ビル
財団法人 特攻隊戦没者慰霊平和祈念協会
電話 03(3432)1090

編集人 田中賢一
発行人 木村元正

大東亜戦争 忠魂顕彰五十五年祭

於靖國神社
十二月八日

我が協会の相談役でもある国士館大学の金城和彦教授を代表者とする「大東亜戦争忠魂顕彰会」では毎年12月8日は靖國神社で祭典を行っている。この祭典の趣意書には次のような文面がある。

「戦後の我国はあれから五十五年経た今でも、強制された歴史の断絶や、偏見と虚偽に満ちた報復の東京裁判による戦争犯罪者意識に毒され、大東亜戦争という歴史的事実は、いまだに我の立場に立つ民族の魂とはならず、その名をアメリカの言う太平洋戦争と呼び、しかも我が同胞が身を挺して遂行したこの戦を、自ら侵略戦争と断じて恥じぬ者のある有様で、それは忠魂を冒瀆する許し難い風潮であります。

……我々はただ一途に崇高なる忠魂の名誉と御国の誇を念ずるの余り、戦いに敗れた八月十五日をとらず、神々のいます靖國神社本殿の大前で、伏して忠魂の遺志と殉国を偲ぶと共に、自らに誓う「大東亜戦争忠魂顕彰祭」を斎行いたす次第であります。」

この祭典のもう一つの特色は、参列者を代表して祭文を奏上するものは、いつも若い大学生である。今回日本大学四年生の石井信博君が奏上した祭文は、開戦の止むなきに至った当時の米国の対日圧迫から説き起し、御祭神の方々が勇戦奮闘国に殉せられたことを述べ、それによって我が国の現在の繁栄とアジアの国々が欧米の植民地から開放されたと告げている。続いて現在の国内情勢について、歴史認識や教科書問題、更には竹島・尖閣諸島のことに及び、嘆かわしい事態と断じ「けれども明るいきざしがないわけではありません。いま私ども若い世代を中心に、今の我が国の在り方について、もちろん領土問題や歴史認識に対しても、このままではいけないと思い始める人が増えてくるようになっております」と述べ、「私どもは、いかに同世代の若い人々に真の日本の姿を語っていくかを日々考え、またそれを実行していくということを決意し、ここにお誓い申し上げます」と結んでいる。

御祭神の大部はこの年齢だった。み魂も感応せられたことと思う。み魂なごめの祭というが、英霊が殉ぜられた祖国の将来に裨益するものでなければみ魂なごめにはならぬ。

目次

忠魂顕彰五十五年祭……1
開戦記念日の意義……2
短歌にみる十二月八日……2
B—29に対する体当り②……3
小林軍曹機掘り起し……14
B—29の基地に対する経空攻撃④……17
誠36 37 38特攻隊員の寄書き……22
知覧のこと……25
川南護国神社の例祭……27
海上挺進戦隊慰霊祭……27
光「回天」の碑除幕……28

開戦記念日十二月八日の意義

八月十五日を終戦の日とし様々な行事が行われているが、我が政府がポツダム宣言受諾を敵国に通告したのは前日の14日で、15日は玉音放送によって国民が降伏を承知した日である。それはさておき、この日を大東亜戦争戦死者に対する追悼の日とするのは、それ相応の意義は認める。しかし、大東亜戦争について、敗戦の日だけを記念日的に扱うことには聊か異議がある。昔は十二月八日を大詔奉戴日と称し、軍隊は勿論のこと官庁や学校、民間の職場に至るまで宣戦の詔書を奉読し、決意を新にしていた。今更大詔奉戴日を復活せよとは言わないが、この日を何故に開戦に踏切らなければならなかったかを考え且つ啓蒙する日とし、それにふさわしい催を行う日とすべきである。歴史を正しく考察すれば、侵略戦争などという誤った考は生れる筈がない。

ここに「米英ニ対スル宣戦ノ詔書」の中の開戦に至った経緯について述べておられる部分を掲げてみれば、

抑々東亜ノ安定ヲ確保シ以テ世界ノ平和ニ寄與スルハ丕顯ナル皇祖考丕承ナル皇考ノ作述セル遠猷ニシテ朕カ拳々措カザル所而シテ列国トノ交誼ヲ篤クシ萬邦共栄ノ楽ヲ偕ニスルハ之亦帝国カ常ニ國交ノ要義ト為ス所ナリ今ヤ不幸ニシテ米英兩國ト釁端ヲ開クニ至ル洵ニ已ムヲ得サルモノアリ豈朕カ志ナラムヤ（中略）米英兩國ハ残存政權（註重慶政府のこと）ヲ支援シテ東亜ノ禍亂ヲ助長シ平和ノ美名ニ匿レテ東洋制覇ノ非望ヲ逞ウセントス剰へ與國ヲ誘ヒ帝國ノ周邊ニ於テ武備ヲ増強シテ我ニ挑戦シ更ニ帝國ノ平和的通商ニ有ラユル妨害ヲ與ヘ遂ニ經濟斷交ヲ敢テシ帝国ノ生存ニ重大ナル脅威ヲ加フ朕ハ政府ヲシテ事態ヲ平和ノ裡ニ回復セシメントシ隠忍久シキニ彌リタルモ彼ハ毫ニ交譲ノ精神ナク徒ニ時局ノ解決ヲ遷延セシメテ此ノ間却ツテ益々經濟上軍事上ノ脅威ヲ増大シ以テ我ヲ屈從セシメムトス斯ノ如クニシテ推移セムカ東亜安定ニ關スル帝國積年ノ努力ハ悉ク水泡ニ歸シ帝國ノ存立亦正ニ危殆ニ瀕セリ事既ニ此ニ至ル帝國ハ今ヤ自存自衛ノ為蹶然起ツテ一切ノ障碍ヲ破碎スルノ外ナキナリ（以下略）

この詔書は開戦に至った理由が明快に述べられており、そこには侵略の意図など微塵も窺えない。十二月八日を大東亜戦争の意義を宣揚する日としよう。往年の民族意気を恢弘し自虐謝罪の弊風を払拭せねばならぬ。

短歌に見るこの日

眞珠湾に突入した特殊潜航艇九軍神の一人、古野繁実中尉の遺詠

君のため何か惜しまぬ若桜
散って甲斐ある命なりせば

いざゆかむ網も機雷も乗り越えて
撃ちて眞珠の玉と砕けむ

古野中尉は二十五歳。「アララギ」の投稿歌の一首に、

還らざる九人の面影に付されたる
年齢（とし）はあまりに若くかなしき

連合艦隊司令長官山本五十六は、次のような追悼歌を詠んだ。

益良雄のゆくとう道をゆききわめ
わが若人らつひにかへらず

比なき勲をたてし若人は
永久にかへらずわが胸痛む

なお山本五十六のこの頃の作を拾ってみれば、

開戦直前の作

咲き匂ふ花の中にもひとときは
かおりぞ高き花の益良雄

ある人の手紙に答えて

武士（もののふ）の心如何にと人問はば
斃れて後に已むと答えむ

十二月八日大詔を拝して

大君の御楯とただに思ふ身は
名をもいのちも惜しまざらなむ

十二月八日開戦の直後に

突撃の電波は耳をつんざきぬ
三千浬外ハワイの空より

開戦時空母蒼龍に乗り組み、後にミドウェーで艦と運命を共にした海軍特務大尉佐藤完一の作。

全機無事帰還の報あり通風孔に
耳を澄ませば爆音きこゆ

主計科の心ずくしの赤飯を
食ひ終わりたり午前一時十五分

今はしも司令官以下起立して
軍歌歌ひぬ決死隊の軍歌

七生報国今ぞ説きます艦長の
語調は平常に少しも変らず

艦首の方を日本と定めて姿勢正し
眼閉ずれば涙垂りくる

この頃新聞には一流歌人の作が次々と発表された。朝日新聞が出したものを拾ってみる。

○時しもあれ大みことのり降りたり肉むらゆらぎ命の激（たぎ）つ　（古植庄亮）

○街路樹の落葉を強くふみしめてもだしあゆみぬ十二月八日（加藤順三）

○何なれや心おごれる老大の耄碌国を撃ちてしやまん　（斉藤茂吉）

○ますらおや一たびたてばイギリスのしこの黒ふね水きはてつも（会津八一）

○ボルネオに迫ると聞けば心おどる白人邪（よこしま）に此所を占めにき（土屋文明）

○こころざし伴（とも）の隼雄におとらめやきびしく生きむ年の来向ふ（釈超空）

本土上空の特攻
B―29に対する体当り ②

（マリアナ発進の部）

第二十一爆撃コマンドの対日本土空襲開始

第二十一爆撃コマンドのマリアナ進出

米軍はマリアナ諸島攻略に伴い、B―29用基地をサイパンに一カ所、テニアン及びグァムに各二カ所建設し、各基地にそれぞれ爆撃ウィング一個を配置することにした。

これら基地の設定に伴い、進出した部隊及び進出時期は次のとおりである。

これら五個の爆撃ウィングは、第二十一爆撃コマンド（司令官　ハンセル准将）の隷下であり、同コマンドは第二十航空軍（軍司令官　アーノルド大将）に隷属していた。

ハンセル准将は、10月中旬サイパンに到着し、同月末第一サン・アントニオ計画と称する第一回東京空襲の作戦計画をアーノルド大将に提出した。

この計画は、一〇ないし一二スコードロン（Squadron）（各スコードロンはB―29九～一一機）をもって、昼間三万フィートの高度から目視爆撃を行うもので、各機の携行爆弾は五、〇〇〇ポンド（焼夷弾三〇パーセント、五〇〇ポンド破裂爆弾七〇パーセント）と予定されていた。攻撃実施期日については、早い期日を望みながらも、ハンセル准将はB―29一〇〇機以上の集結使用を条件としていた。

島名	飛行場名	部隊名	進出時期
サイパン	イスレイ	第七十三爆撃ウィング	昭和十九年八月
グァム		第二十一爆撃コマンド司令部	同司令部先遣班は、昭和十九年八月サイパンに到着
テニアン	北	第三百十三爆撃ウィング	昭和十九年十二月
グァム	北	第三百十四爆撃ウィング	昭和二十年一月
テニアン	西	第五十八爆撃ウィング	同　三月
グァム	西	第三百十五爆撃ウィング	同　四月

そのころ、日本軍戦闘機の抵抗を正確に予想することはできなかったが、ワシントンでは日本本土の第一線戦闘機を10月中旬には一、一一四機、11月初頭には六〇八機と推定していた。

これより先10月中旬、ニミッツ司令部はホットフート計画を立案し、11月中旬初め艦載機による東京地区空襲を開始し、B―29が東京空襲を開始するまでに日本軍防空戦闘機陣に甚大な損害を与えようとした。

アーノルド大将はこの計画を条件付きで承認し、ハンセル准将に対し、ホットフート計画の実施が確実な場合に限り、艦載機に引き続いてB―29による攻撃を行ない、不確実な場合には、十分な兵力を集結後B―29単独で東京空襲を行なうよう通告した。

当時、マリアナに進出していたB―29部隊は第七十三爆撃ウィングのみで、その保有機数は11月15日九〇機、11月22日一一八機であった。

昭和19年（一九四四年）11月1日〇五五〇サイパンを出発したF―13（写真偵察用B―29）は、三二、〇〇〇フィートの高度で東京上空に進入し、写真偵察を実施した。これは17年4月以来初めての東京侵入であった。

これを始めとし、F―13は単機で、何回となく日本本土の写真偵察を行なったが、日本軍戦闘機及び高射砲ともに効果がなかった。例えば、11月7日に舞い上がってきた戦闘機一〇〇機のうち二機だけが、高々度を飛ぶF―13の一、〇〇〇ヤード以内に接近しただけであった。

（関東地区）

19年11月1日以降数回にわたり少数機が本土上空に偵察に飛来し、その都度我が戦闘機が要撃に飛立ったが、敵機の高度は一万二千メートルもあり攻撃できなかった。

関東地方の防空を担当していたのは第10飛行師団である。

第十飛行師団における特別攻撃隊の編成

（戦史叢書抜粋）

吉田飛行師団長は来襲機が少数であっても、これを撃墜しなければ防空任務の達成にならないと考え、敵機来襲の都度ほとんど全力をもって撃墜に努めたが、現用戦闘機の高々度性能不良のため、いずれも失敗に終わった。防空任務達成のためには、まず邀撃戦闘機を適時高々度に上昇させることが

マリアナ諸島からの出撃表（偵察行動は除いてある）

年月日	目標	出撃機数	目標爆撃機数	損失数
19・11・24	東京	111	24	2
11・27	〃	81	49	1
11・29～30	〃	29	23	1
12・3	〃	86	60	5
12・13	名古屋	90	71	4
12・18	〃	89	63	4
12・22	〃	78	48	3
12・27	東京	72	39	3
20・1・3	名古屋	97	57	5
1・9	東京	72	18	6
1・14	名古屋	73	40	5
1・19	明石	80	62	0
1・23	名古屋	73	28	2
1・27	東京	76	56	9
2・4	神戸	110	69	2
2・10	太田	118	84	12
2・15	名古屋	117	33	1
2・19	東京	150	0	6
2・25	〃	229	172	3
3・4	〃	192	0	1
3・9～10	〃	325	279	14
3・11～12	名古屋	310	285	1
3・13～14	大阪	301	274	2
3・16～17	神戸	330	306	3
3・18～19	名古屋	310	290	1
3・24～25	〃	248	223	5
3・27	九州	161	151	0
3・27～28	下関（機雷）	102	92	3
3・30～31	名古屋	14	12	0
3・31	九州	149	137	1
4・1～2	東京	121	115	6
〃	呉（機雷）	6	6	0
4・2～3	広島（機雷）	10	9	0
4・3～4	〃（機雷）	9	9	0
〃	静岡	49	48	0
〃	小泉	78	43	0
〃	立川	115	61	1
〃	東京	107	101	3
19・11・24	名古屋	194	153	2
11・27	鹿屋	32	29	0
11・29～30	九州	53	48	1
12・3	下関（機雷）	20	16	0
12・13	東京	114	93	0
12・18	郡山	82	66	0
12・22	〃	85	70	2
12・27	下関（機雷）	5	5	0
20・1・3	東京（兵器廠）	348	327	7
1・9	川崎	219	194	12
1・14	東京	118	109	1
1・19	九州	108	98	0
1・23	〃	131	112	2
1・27	〃	252	217	0
2・4	〃	103	87	1
2・10	立川	131	101	5
2・15	九州／四国	255	195	0
2・19	九州	123	109	2
2・25	〃	129	119	5
3・4	〃	121	111	2
3・9～10	立川	106	69	0
3・11～12	九州	66	56	0
3・13～14	〃	66	59	1
3・16～17	九州／四国	62	47	1
3・18～19	九州	60	55	3
3・24～25	呉	170	148	2
3・27	神戸その他（機雷）	98	86	0
3・27～28	九州	42	41	3
3・30～31	九州／四国	44	40	0
3・31	〃／〃	67	42	0
4・1～2	徳山	60	54	0
〃	〃	63	56	0
4・2～3	大竹	132	112	1
4・3～4	大島	88	80	0
〃	九州	65	50	0
〃	神戸	102	92	1
〃	新潟その他（機雷）	12	12	0
4・7	名古屋	524	472	11
5・11	〃	194	153	2
5・12～13	〃	32	29	0
5・14	〃	53	48	1
5・15～16	〃	20	16	0
5・17～18	〃	114	93	0
5・19	〃	82	66	0
5・20～21	〃	85	70	2
5・22～23	〃	30	26	0
5・23～24	〃	32	30	0
5・24～25	〃	30	25	0
5・25～26	〃	558	464	26
5・26～27	〃	498	29	0
5・27～28	〃（〃）	11	9	1
5・29	〃	510	454	7
6・1	〃	509	458	10
6・5	〃	530	473	11
6・7	〃	449	409	2
〃	〃	31	26	0
6・9	〃	16	44	0
〃	〃	26	24	0
〃	〃	44	42	0
6・9～10	〃	28	26	0
6・10	〃	29	23	0
〃	〃	33	32	0
〃	〃	124	118	0
〃	〃	27	26	1
〃	〃	34	29	0
〃	〃	65	52	0
〃	〃	27	26	0
〃	〃	30	29	0
〃	〃	511	444	2
〃	〃	28	25	2
〃	〃	120	117	1
〃	〃	126	116	0
〃	〃	137	130	0
〃	〃	94	89	0
〃	〃	141	136	0
〃	〃	237	221	0
〃	〃	137	125	2
20・4・7	名古屋	516	457	3
4・8	下関（機雷）	81	49	1
〃	九州	29	23	1
4・9～10	下関（機雷）	86	60	5
4・12	東京	90	71	4
〃	郡山	89	63	4
〃	〃	78	48	3
4・12～13	下関（機雷）	72	39	3
4・13～14	東京（兵器廠）	97	57	5
4・15～16	川崎	72	18	6
〃	東京	73	40	5
4・17	九州	80	62	0
4・18	〃	73	28	2
4・21	〃	76	56	9
4・22	〃	110	69	2
4・24	立川	118	84	12
4・26	九州／四国	117	33	1
4・27	九州	150	0	6
4・28	〃	229	172	3
4・29	〃	192	0	1
4・30	立川	325	279	14
〃	九州	310	285	1
5・3	〃	301	274	2
5・4	九州／四国	330	306	3
5・5	九州	310	290	1
〃	〃	248	223	5
5・5～6	神戸その他（機雷）	161	151	0
5・7	九州	102	92	3
5・8	九州／四国	14	12	0
5・10	〃／〃	149	137	1
〃	〃	121	115	6
〃	〃	6	6	0
〃	〃	10	9	0
〃	〃	9	9	0
〃	〃	49	48	0
〃	〃	78	43	0
〃	〃	115	61	1
〃	〃	107	101	3
20・5・16～17	下関（機雷）	111	24	2
〃	名古屋	30	25	0
5・18～19	下関（機雷）	34	30	0
5・19	立川／浜松	309	272	4
5・20～21	下関（機雷）	30	30	3
5・22～23	〃（〃）	32	30	1
5・23～24	東京	558	520	17
5・24～25	下関（機雷）	30	25	0
5・25～26	東京	498	464	26
5・26～27	下関その他（機雷）	30	29	0
5・27～28	〃（〃）	11	9	1
5・29	横浜	510	454	7
6・1	大阪	509	458	10
6・5	神戸	530	473	11
6・7	大阪	449	409	2
〃	下関その他（機雷）	31	26	0
6・9	川西・鳴尾工場	16	44	0
〃	川崎・明石工場	26	24	0
〃	名古屋（熱田）	44	42	0
6・9～10	下関（機雷）	28	26	0
6・10	藤ヶ浦	29	23	0
〃	富岡	33	32	0
〃	東京	124	118	0
〃	千葉	27	26	1
〃	東京・荻窪	65	52	0
〃	立川	34	29	0
〃	下関（機雷）	27	26	0
6・11～12	〃（〃）	30	29	0
6・13～14	〃（〃）	511	444	2
6・15～16	下関（機雷）	30	25	2
6・15	大阪	28	25	1
6・17～18	〃（〃）	120	117	0
6・17～18	鹿児島	126	116	0
〃	大牟田	137	130	0
〃	浜松	94	89	0
〃	四日市	141	136	0
6・19～20	豊橋	237	221	0
〃	福岡	137	125	2
〃	静岡	30	25	0

年月日	目標	出撃機数	目標撃墜機数	損失数
20・6・19～20	下関（機雷）	28	28	0
6・21～22	大阪	30	25	0
6・22	呉工廠	195	162	2
〃	三菱玉島工場	123	108	2
〃	姫路	58	52	0
〃	各務原	28	17	0
〃	〃	21	17	1
〃	川崎・明石工場	30	25	0
6・23～24	福岡	27	26	1
6・25～26	下関（機雷）	27	26	0
6・26	大阪	64	4	0
〃	大阪・陸軍工廠	109	3	1
〃	川崎・明石工場	38	31	0
〃	名古屋工廠	35	33	0
〃	〃	32	25	1
〃	三菱・各務原工場	60	17	1
〃	愛知・永徳工場	67	50	2
〃	名古屋	33	29	0
〃	川崎・各務原工場	35	25	1
6・26～27	四日市	35	33	0
6・27～28	神戸	30	29	0
6・28～29	岡山	141	138	1
〃	佐世保	145	141	0
〃	門司	101	91	0
〃	延岡	122	117	0
6・29～30	日本石油・下松工場	36	32	0
〃	下関（機雷）	29	25	0
7・1～2	呉	160	152	0
〃	熊本	162	154	1
〃	宇部	112	100	0
〃	下関	141	127	1
〃	下関（機雷）	28	24	0
7・2～3	丸善石油・瓦島工場	40	39	0
〃	下関（機雷）	31	26	0
7・3～4	高松	128	116	2
〃	高地	129	125	1
〃	姫路	107	106	0
〃	徳島	137	120	0
〃	千葉	129	124	0
7・6～7	明石	131	123	0
20・7・6～7	清水	136	133	1
〃	甲府	138	131	0
〃	丸善石油・大阪工場	60	59	0
7・9～10	下関（機雷）	31	29	1
〃	仙台	131	123	1
〃	堺	124	115	0
〃	和歌山	109	108	0
〃	岐阜	135	129	1
〃	四日市	64	61	1
7・11～12	下関（機雷）	30	25	2
〃	宇都宮	130	115	1
7・12～13	一宮	130	123	0
〃	敦賀	98	92	0
〃	宇和島	130	123	0
〃	川崎燃料センター	60	53	2
7・13～14	下関（機雷）	31	30	0
〃	釜山その他（機雷）	28	26	0
7・15～16	日本石油・下松工場	69	59	0
〃	沼津	128	119	0
7・16～17	大分	129	124	0
〃	桑名	99	94	0
〃	平塚	132	129	0
〃	下関（機雷）	30	27	0
7・17～18	神戸／大阪（機雷）	31	27	1
7・19～20	福井	130	127	0
〃	日立	130	126	2
〃	銚子	97	91	0
〃	岡崎	130	126	0
〃	尼崎	84	83	0
〃	下関（機雷）	29	23	1
7・23～24	宇部	80	72	0
〃	大阪	90	82	1
7・24	宝塚	88	81	0
〃	大阪／桑名	170	154	0
〃	名古屋・永徳工場	74	66	0
〃	津	41	38	0
〃	津	81	75	0
〃	半田	81	77	0
〃	川崎／葉山	83	75	1
7・25～26	釜山その他（機雷）	30	29	0
20・7・26～27	松山	129	127	0
〃	徳山	102	97	0
〃	大年田	130	124	1
7・27～28	下関（機雷）	30	24	3
〃	津	78	76	0
7・28～29	青森	65	61	0
〃	一宮	127	122	0
〃	宇治山田	99	93	0
〃	大垣	96	90	0
〃	宇和島	32	29	0
〃	和歌山・下津精油所	82	76	0
7・29～30	下関（機雷）	29	24	0
8・1～2	〃（〃）	43	37	0
〃	八王子	180	169	1
〃	富山	182	173	0
〃	名古屋	136	125	0
〃	水戸	167	160	0
〃	川崎／葉山	128	120	0
8・5～6	羅津その他（機雷）	30	27	0
〃	佐賀	65	63	1
〃	前橋	102	92	0
〃	西宮／御影	261	250	1
〃	宇部	111	106	0
〃	今治	66	64	0
〃	豊川海軍工廠	131	124	1
8・7	下関その他（機雷）	32	29	0
8・7～8	八幡	245	221	4
8・8	中島飛行機・武蔵野工場	69	60	3
〃	福山	98	91	0
8・8～9	尼崎・石油工場	107	95	0
8・9～10	中島荻窪工場／東京工廠	78	70	0
8・10	下関その他（機雷）	31	31	0
8・10～11	徳山海軍工廠	167	157	0
8・14	大阪兵器廠	161	145	0
〃	マリフ鉄道操車場	115	108	0
8・14～15	日本石油・ツチザキ工場	141	132	0
〃	熊谷	93	81	0
〃	伊勢崎	93	86	0
〃	下関その他（機雷）	39	35	0

原爆投下のような少数機は除外してあるらしい。

必要であった。しかし、当時その性能を備えた戦闘機を望むことはできなかった。現用戦闘機の装備を取りはずして重量をできるだけ軽くするほかに方法がなかった。このため、防弾鋼板や爆撃装備はもちろん、射撃装備さえ取りはずして、敵機に体当たりを敢行するよりほかに方法はないと考えられた。

第十飛行師団においては、かねて防空任務達成のため特別攻撃隊の編成を計画していたが、11月7日、遂に吉田飛行師団長は各飛行戦隊に対して、それぞれ四機の特別攻撃隊の編成を命じた。

注1　第十飛行師団参謀松村謙馬中佐（39期）の回想

昭和19年11月に入り、サイパンからB－29がしばしば本土に来襲したので、飛行師団はその都度相当の戦力で邀撃したが、敵機が九、五〇〇米あるいはそれ以上で行動するのに対し、友軍機の威力はおおむね八、五〇〇米程度までであり、高射砲の射程も七、〇〇〇米程度までしか及ばなかった。帝都上空の衆人環視の中で行なわれる防空戦闘がこのようであったから、空地の要地防空部隊ともに切歯扼腕し、何とかして敵機をたたき落とさなければならないと感じていた。また国民の中には、わずか一機の敵機に多数の友軍機が翻弄されるのを見て、防空飛行隊は何をしているのかと蔭口をたたく者もでてきた。

11月7日、吉田飛行師団長が特攻隊編成を決意したのはこのためであり、この決心は部下の意見具申によるものではなく、師団長自身がなされたものであるが、師団のほとんどがこのほかに敵機撃墜の方法はないと感じていたと思う。

このとき発令された師団命令の要旨は次のようであったと思う。

一　敵B－29は昨今しばしば単機高々度をもって帝都上空に来襲す。

二　師団は特別攻撃隊を編成し、これを邀撃撃墜せんとす。

三　各戦隊長は四機をもって特別攻撃隊を編成し、高々度で来襲する敵機に対し体当たりを敢行し、これを撃墜すべし。

私は連絡機により、同日一六〇〇ごろから調布を始めとして各飛行場を回り、各戦隊長にこの命令を伝達したところ、各戦隊長はこの命令を快く受け、直ちにその編成にとりかかる旨を答えた。

なお、この特攻隊は敵艦船に対する特攻と若干趣を異にするものであり、出動しても敵機を捕捉攻撃できなければそのまま帰還し、また体当たりを行なったのちも、可能な限り落下傘で降下することが考えられていた。

10月初における第10飛行師団隷下の防空戦闘隊は次の通りだった。

独立飛行第17中隊　調布　百式司偵
飛行第244戦隊　調布　三式戦
飛行第47戦隊　成増　二式戦
飛行第53戦隊　松戸　二式複戦
飛行第23戦隊　印旛　一式戦
飛行第18戦隊残置隊　柏　三式戦
飛行第70戦隊残置隊　柏　二式戦

これ以外に次の部隊が防空戦闘について指揮を受けることになっていた。

常陸教導飛行師団、鉾田教導飛行師団、下志津教導飛行師団の各飛行隊及び第一練成飛行隊。

各戦隊の体当たり戦闘

体当たり特攻隊の編成を命ぜられた各戦隊の対応とその戦闘振りについて、記録の入手できたものを引用する。

○飛行第47戦隊長奥田暢少佐談（陸軍航空の鎮魂より）

10FDにおいては、かねてから防空任務達成のため特別攻撃隊の編成を計画していたが、11月7日、ついに吉田喜八郎10FD長は各飛行戦隊に対して、それぞれ4機の特別攻撃隊の編成を命じた。すなわち迎撃戦闘機を適時高々度に上昇させることが任務達成上不可欠であり、戦闘機の高々度性能の向上を望めない現在、現用機の装備を取りはずして重量を出来るだけ軽くするほかに方法がなかった。このため、防弾鋼板や爆撃装置はもちろん、ガソリンタンクの生ゴムの覆い、射撃装置、機関砲までとりはずして敵に体当たりを敢行するより方法はないと考えられた。

敵機に接敵攻撃する場合、最も効果的な前方攻撃を採用していたが、遠方でわずかに軸線がはずれていても、近づくに従ってその差が大となるので、体当たりは極めてむづかしいから、むしろ、射撃によって敵機撃墜に努めた方がよいと考えていた。しかし体当たりも辞さないという意気込みで攻撃しなければ戦果はあがらないものであり、又、戦闘操縦者の攻撃精神も極めておう盛であったから、特攻隊編成に関する師団命令を受領したとき、私は特に抵抗を感じることはなかった。

この命令を全操縦者に下達し、各人ごとに特攻隊志望の有無を密封の上提出させたが、その結果はほとんどが熱望であり、ごく一部が希望であった。熱望者の中から、家庭状況、各中隊の

人員、技量等の状況を考え、戦隊長の責任において決定し、第1回には鈴木精曹長、坂本勇曹長、見田義雄伍長、永崎隆良伍長の4名を選んだ。

特攻隊員に対する待遇は、他の操縦者と変わりなく訓練、起居も各中隊にあって他と同様であったが、高々度訓練だけは特に教官を指定して集合教育を実施した。迎撃出動に際しては戦隊長が直接、出動命令を下した。この特別攻撃隊は防衛総司令官東久邇宮稔彦王殿下の命令で震天制空隊と呼ばれた。

11月24日の戦闘

サイパンから第1回本格的襲来である。この日の敵の針路は島づたいに北上して本土接近までは低空で我レーダーの捕そくを避けその後逐次高度を上げ、9千米から1万米をとり富士山を変針点として偏西風55粁の追風に乗り、対地速度七百粁の高速による一航過で、中島飛行機武蔵野工場を爆撃して、鹿島灘へ退去した。

この日の敵機情報は前回の少数機の単機行動と異り、大規模の本格的来襲であったためサイパン発進時からその交信をとらえ、続いて監視艇、八丈島レーダーがその動きを次々にキャッチした。

11時30分、師団は多数機の本土来襲と判断し、全防空戦隊に出動を命じた。万全の準備を整えて待機していた我が戦隊も、第2中隊を先頭に第3中隊、第1中隊、戦隊長編成の順序で、一糸乱れず離陸、40機の編隊をガッチリと組んで発進した。目指すは八王子上空高度1万米である。わが戦隊は1万米まで上昇できずに、脱落したもの2～3機を出したが、他は40分後には八王子上空1万米に達し、西の空をにらんでいた。震天制空隊にも出動命令が出たのはもちろんである。彼らの乗機はカウリングから胴体にかけて鮮血色の一線が塗られ一目で震天隊と識別できるようになっていた。この日見田義雄伍長は銚子沖5粁の海上で壮烈な体当たり攻撃敢行し、第1中隊山家曹長がその模様を目撃していた。見田機は真紅の火玉となって海中に突込んだが尾部をもぎとられた敵機もまた、のたうちまわりながら海中に没し去ったのだった。

我が方の戦果は撃墜5、撃破9と発表されたが、米軍の発表では「2機墜落、8機損害、1機海上に不時着、墜落の1機は計画的に衝突された」となっている。なお地上の損害は軽微であった。

この米軍の発表は見田伍長の体当たりを意味することはいうまでもない。帝都防空部隊体当たり攻撃の先駆をした見田伍長は神戸市出身、まだ19才の紅顔の少年であった。ふだんは物静かな彼のどこに、このような烈々たる気概がひそんでいたのだろうか。そういえば私の見た多くのパイロット仲間では地上でおとなしいものほど空中では大胆であり、操縦にも優れていたようである。これがほんとうのパイロット気質というものであろう。

そのころ、我々パイロット同志の気持を表す言葉に「散る桜、残る桜も散る桜」というのがあった。これは沖縄作戦で嘉手納飛行場に強行なぐり込み着陸を敢行した義烈空挺隊長奥山大尉がよんだものであるが、今日はお前が征って俺が残る、しかし、その残った俺も明日は征くぞ、というパイロット同志の悲痛な心意気を意味したものである。震天隊員は当然散る桜である。しかし、あとに残った我々も又、間もなく散らねばならぬ桜なのであった。

12月3日の戦闘

この日B29約70機が10てい団をもって本土に侵入し、1万米の高度から三鷹付近を爆撃後銚子付近から洋上に脱出した。13時54分、師団は各戦隊全力出動を命じ、わが戦隊は富士山東方大月付近の上空1万米に推進待機していたが、私の編隊は敵編隊の外側の少し遅れている1機を襲い、とうとう羽田沖に仕止めたが1万米の高空から海面に落ちるまで、きりもみ状態になっては水平に回復し、またきりもみになっては回復すること3回に及んだ。B29の安定のよさに驚嘆せざるを得なかった。

この日の師団は撃墜21機、内不確実6機の戦果を報じた。B29は中島飛行機武蔵野工場を目標としたが損害は少なかった。

12月27日の戦闘

この日鈴木精曹長が散華した。彼の特攻機は離陸直後故障して引き返した。代機にかえてテストもせずに飛び立って行ったが、高度1万米で敵編隊長機の機首を粉砕して首尾よく任務を果たしたのである。彼の機体の一部が青梅の川から引き上げられたとき、エンジンはもとより脚の支柱に至るまで敵弾によって蜂の巣のようで敵砲火の熾烈さに一同驚歎させられた。

坂本勇曹長は同じ日、成増上空1万2千米で待機していたが、日立航空機立川工場を爆撃したB29編隊20機を捕捉し、直上方から突進し敵後尾機の尾翼を吹きとばした。はげしいショックで座席から投げ出された彼は自動開傘装置により落下傘降下し、牛込第一陸軍病院の大榎の枝にぶら下り奇跡の生

還をした。今も彼は健在であるが、搭乗員の腕に日の丸の標識をつけるようになったのは、この時からである。なぜならば彼は下から竹槍で突っかれそうになったのである。

1月9日の戦闘

敵機のエンジンに残る毛髪

この日成増基地上空にあった幸万寿美軍曹は、地上部隊員注視の中で、敵第1てい団11機の最左翼機に対する体当たりに成功した。彼の肉体はその乗機とともに、文字通おり微塵となって四散落下した。敵機は左外側のエンジンをふっ飛ばされ黒煙を引きながらしだいに編隊から遅れていったが、松崎大尉の編隊により止めをさされて千葉県神代村に墜落した。

幸軍曹の凄烈な体当たりの瞬間は新聞記者のカメラにおさめられ新聞に掲載された。数日後、椎名町附近に落下した敵機のエンジンに毛髪のついた頭の皮膚が発見された。我ら一同落涙にむせんだのは、つい昨日のように感じられる。この日粟村尊准尉は銚子上空で遁走して行く敵機に体当たりを敢行し墜落して行く敵の後から彼も又鹿島灘へ散華して行った。

この日の師団発表の戦果は撃墜確実11機内特攻隊その他の体当たりによるもの6機となっている。

この奥田戦隊長談には出ていないが、このあと20年2月10日同戦隊の吉沢平吉中尉が、太田上空で体当たり撃墜し自らも散華している。

○飛行第244戦隊古波津里英少尉談

（続陸軍航空の鎮魂より）

東京の調布に基地をもつ飛行第244戦隊は三飛行中隊より成り私は第2飛行中隊（隊長竹田五郎大尉＝55）付となり帝都防衛の通称近衛飛行戦隊の一員に加えられた。同月末新進気鋭の小林照彦大尉（53期間もなく少佐に進級）が戦隊長として赴任され、いきいきとした雰囲気がみなぎっていた。

その頃南方の比島海域では彼我の攻防戦が激しく我が特攻万朶隊、靖国隊、海軍の神風特攻隊が次次と連合軍の艦船に体当たり攻撃を敢行していた。帝都にはマリアナ基地からB29が頻繁に来襲するようになった。11月中に大規模三回、少数機による空襲が六回を数えた。B29は御前崎あたりから侵入し富士山に至り高度一万米で偏西風にのって来襲するのが常道だった。これに対し我が三式戦闘機（飛燕）の能力は精々七～八千米が限度でこれ以上の高度ではとても戦闘など出来るものではない。この状態は他の機種でもほぼ同様であった。窮余の策として飛行師団長は各戦隊に対しB29体当たり専門の特攻隊編成を指令、これは震天制空隊と命名された。この指令を受け我が244隊では四宮徹中尉（56）を隊長に井上忠彦少尉（特操1期）中野松美伍長（少飛）板垣政雄伍長（少飛）の四名でもって震天制空隊が編成された。出来るだけ軽くし、上昇能力をアップする為銃器、座席背部の鋼板、燃料タンクの防護ゴム等を取りはずした。

12月3日、B29一〇梯団計約七〇機が来襲した。我が震天制空隊の四宮中尉は果敢な体当たりの後に片翼よく飛行場に帰還、中野伍長はB29に馬乗になりぷろぺらでB29をかじって自らは田圃に不時着生還、又板垣伍長も体当たり後落下傘降下し、全員生還した。闘魂まことに逞しく後日この3名は再び体当たりを敢行した。震天制空隊以外には1月9日丹下充之少尉（特操一期）は立川北方上空でキラキラと機体を輝かせ乍ら接敵B29に体当たり衆人注視のうちに壮烈な戦死を遂げた。彼は大学の理科系の出身で実に真面目な戦友だった。同じ日に震天制空隊長高山正一少尉（57期で四宮中尉の後任）は体当たり生還した。1月27日、高山少尉は再び体当たりを敢行、その大任を果して帝都上空に散華した。同少尉は口数の少いはにかみやの好青年だった。同じ日中野、板垣の両伍長は奇蹟の再度体当たり生還、更に小林戦隊長自身率先垂範B29に体当たりをして生還した。この将にしてこの兵、まるで体当たり旋風となる。この間1月3日竹田五郎大尉の率いる浜松派遣隊は、中京防空戦でB29五機撃墜七機撃破我が方損害なしの戦果をあげ、東部軍司令官から名誉の感状を授与された。この頃の244戦隊は関東と中京の防空に大敢闘をしたときである。

2月に入ると、敵は硫黄島攻略の支援作戦としてB29の他に小型機による攻撃を開始してきた。時に2月16日は早朝より房総沖の連合軍機動部隊より発進の艦載機延千機余が7回にわたり波状攻撃をかけてきた。これが午後4時まで続き、我が戦隊は数回も燃料弾薬を補給しては飛び上るという大奮戦となった。戦果もあがったが群舞する敵戦闘機の中に突込み乱戦模様となり8名の戦死者を出した。この日の戦闘で私と沖縄一中の同窓、特操一期の新垣安雄少尉が奮戦後散華した。堂々とした体格で、包容力のある男でもほれぼれするような快男子だった。良い人間が先に逝くような気がする。その後大本営はB29に対する虎の子部隊が敵小型機による損耗を好まず、しばらく

は邀撃を差控えた。為に我々は髀肉の嘆をかこっていた。

3月2日母校大刀洗陸軍飛行学校の校長だった近藤兼利中将が我々の第10飛行師団長に着任され、親しく激励を受けた。加うるに率先垂範意気盛んな小林戦隊長、信望厚い竹田飛行隊長のもとに隊員一同志気いよいよ挙った。硫黄島（3月17日玉砕）を手中におさめた後、B29は小型機の支援を受けて高度を下げて来襲するようになった。

4月7日早朝、突如ピスト（控所）のスピーカーより「244センタイシュツドウ、トップウタイタナシカラカサ8タカゲタハケ」（第8飛行隊は田無上空高度八千米で警戒せよの意味）。時を移さず竹田隊長を先頭にあいついで離陸、上昇しつつ飛行場上空で編隊を組んで田無上空に向かった。ところが間もなく我が愛機の息切れ異常音に気付き、編隊行動は無理だと判断して直に翼を左右に振り隊長に合図して離脱した。愛機をいたわりつつ高度5千米で単機飛行場附近を警戒することにした。しばらく索敵するうち川崎方面にB29の編隊を発見した。有利な態勢を作るために上昇しながら待機していると、幸にもこちらへ直進してきた。接敵時約五百米の高度差はある。B29には前下方か、直上攻撃しかない。後者は高度差が少くて無理と判断、最も近い二番機に前下方から機銃攻撃をかけ乍らそのまま突込んだ。右側に巨体をかすめて尾翼に衝突した。気がついた時我が愛機は右主翼を全く失って水平錐揉みの状態に入っていた。落下する愛機より脱出を考えたが一度失敗、二度目に運よく成功し、落下傘も開いて大空を浮遊した。B29は飛行場の近く国領の畑に墜落していった。落下傘降下をしながら杉並の方向に目を転じたらB29の巨体がゆるやかに水平錐揉みに入っているのが見えた。二回転半で林の中に接地し同時にパッと大きな火災があがった。これは実は四六時中寝食を共にした特操同期の河野敬少尉の体当たりによるものだった。その日の夕刻松坂伍長の戦死とあわせて悲報が入った。その晩は彼との約束だった「五ツ木の子守唄」を皆で歌って追悼した。先に待っていて呉れ、何れ俺もゆく。

4月15日はB29夜間に来襲、同じ飛行隊の市川忠一中尉は2機撃墜、1機撃破後体当たり生還の大敢闘、その功により個人感状を投与された。柔らかな物腰の中に強力な精神力と抜群の技倆をもった士だった。4月末迄に我が244戦隊は体当たり18回総合戦果、84機撃墜、94機撃破。しかし3～4と月を重ねる毎に敵機は倍増するばかりだった。

○飛行第244戦隊長小林照彦少佐手記（今日の話題社発行「B29対陸軍戦闘隊」より）

震天制空隊三機の体当たり

12月3日14時50分、中野機は帝都上空でB29六機に遭遇した。敵群の高度は九〇〇〇メートルだった。中野機は五〇〇の高度差をもって敵の一番機めがけてまっこうから突き込んでいった。だが攻撃角度が深かかったため体当たりはできなかった。下降した機を中野伍長はふたたび九五〇〇までひき上げたが、もう敵機の姿は見えなくなっていった。

この高度では風速八〇メートルの偏西風が荒れ狂っていて、機はともすれば銚子の方面に流される。電熱服もなくひどく寒いのを、歯を食いしばって我慢する。15時15分、燃料補給のためいったん基地に帰えろうと思ったとき、無電がとびこんできた。

「B29一二機、小田原方面より帝都へ侵入」

見れば西南の方向に高射砲の弾幕がある。そこに、青空をバックにB29四機の編隊が近ずいてくるのが見えた。

「よし、こんどこそ体当たりだ」

中野伍長は先頭のB29めがけて、角度をきめて突きこんでいった。

「あッ、しまった」

またも突進角度が深すぎて体当たりはできなかった。中野機はいそぎ右旋回、もう一度反転して、敵編隊と同線同航となった。うしろを見るとB29の腹の下にはいっていた。高度差わずかに五メートル、あまりに近接したため敵機の下方銃も役に立たない。だが他のB29の射撃がものすごく中野機に集中した。そこには印旛沼の上空だった。

B29の胴体は薄ねずみ色で、まだ爆弾を抱えていた。

「やるゾ！」

中野伍長はグイと操縦桿を引いた。一瞬中野機のペラがB29尾翼の左側水平安定板をもぎとった。次の瞬間、中野機はパッと上に出て、こんどはB29前部に馬乗りのかっこうになった。

中野伍長は馬乗りになったままゆうゆうとあたりを眺めたが友軍機はいなかった。

もう一度ガチャリとやってやろうかと思ったところへ、左方のB29編隊から射ち出す弾丸が中野機のエンジンに命中した。

中野機は右方に落ちていった。だが

落下の途中懸命の操作で見事安定をとりもどした。

不時着するよりほかない。見れば前方に農家がある。いけない。いそぎ右に旋回する。

ペラで地面をかき切り、胴体をぶっつけたが、どうやら着陸できた。衝撃で後頭部と手に負傷した。そこは茨城県稲敷郡太田村の水田の中だった。

村の人たちは、B29の高度がぐんぐん下がってゆくのを見たが、墜落は確認できなかった。しかし水平安定板をもぎとられては致命傷だったにちがいない。

四宮徹中尉は15時25分、ぼんやりとかすんでくる眼で高度計をチラリと見た。九五〇〇メートル、酸素を吸入しているとはいえ、気密気圧の低下しているこの高々度では、生理的影響をまぬかれることはできない。

四宮中尉は視力の弱ったのを感じたが、必死に、四方八方に目をくばって索敵した。

帝都上空、爆撃しているB29五機の編隊が見えた。敵機の高度は九〇〇〇である。高度差は有利である。

四宮機の右主翼、右水平安定板に、まず長さ二五センチ、幅六センチの大穴があいた。

何発ぐらいの敵弾が命中しただろうか。しかし四宮中尉はそんなことにはおかまいなしにただ突進してゆく。

射っても射っても近づいてくる四宮機に、さすがのB29もついに編隊を崩した。

四宮機は最後尾のB29を狙った。その敵はあわてて大きな図体を右にひねった。だが敵の回避は間にあわなかった。

ガクン…四宮機はとてつもない大きな衝撃を受けた。

「しめた！」

四宮中尉は自分の肉体でじかに体当たりの成功を感じとったのである。

四宮機はその瞬間裏がえしになった。左主翼が、敵の右主翼にある外側の発動機に激突してちぎれとんでいた。そして致命的な錐もみとなった。死を覚悟した四宮中尉は操縦桿を前後左右に振りまわした。錐もみから脱出しようという考えのなかった中尉は、錐もみの余勢を利用して、もう一機にぶつかってやろうとした。しかしそのチャンスにはめぐまれず、四宮機は二〇〇〇メートルぐらいのところまで降下して、そこで奇跡的に安定を取り戻したのである。こうなれば、四宮中尉はなんとかして基地に帰ろうと思った。

左足を力いっぱい踏んばった。そして左主翼のない愛機を巧みに操縦して、よたよたと危なかしい足つきではあったが戦友が下からヒヤヒヤして見上げて待つ基地に、体当たりの片翼機は無事接地、地上滑走を見事にやってのけたのであった。

板垣伍長は敵の一一機編隊の長機めがけて急降下の体当たりをかけた。しかし高度差がじゅうぶんでなかったためか、編隊長機も二番機ものがしてしまった。

よし、それではと、板垣伍長は最後尾機を狙うことにした。

ぐんぐん敵機が大きくせまってくる。板垣伍長は一弾も射たない。体当たりあるのみと、すでに決心はついているのだ。だが敵機の火網のまっただ中にとびこんでゆくのである。板垣機は発動機に被弾した。つづいて燃料槽にも被弾して、パッと赤い炎が吹き出した。焦げつくような熱気がせまってくる。板垣機は炎に包まれたまま敵機の主翼のつけ根にぶっつけた。

敵の主翼がふっとぶ。と同時に板垣機も空中分解した。板垣伍長も愛機からほおり出された。それっきり気を失ったが、落下傘は開いていた。降下の途中で板垣伍長は意識を取り戻した。何千メートルかの間、失神したまま降下していたのである。

着陸するとき強く腰を打ったが、板垣伍長は、しかめっつらをして、腰をさすりながら立ち上がった。

以上は小林少佐がこの書物に寄せた手記であるが、戦隊長も後に自ら体当たりをして生還している。このようにB29に対する体当たりは特攻といっても敵艦船に対するものとは趣を異にするが、いつでも生還を期待できるような生やさしいものではない。

○飛行第53戦隊長児玉正人少佐談

（陸軍航空の鎮魂より）

複座戦闘機は仰角固定砲と同乗射手の旋回機銃とによる両火器を併用し敵機の下方に潜って攻撃する戦闘機であるが、高々度1万米で来襲する敵機を有効圏に捉え突進占位するためには、まず自機の高度を確保しておくことが不可欠の要件であった。しかるに、飛行性能はその限界に近い高度であったから、技量の高い者でもこの克服には苦心した。

こうした自らの苦しい体験から、未熟な隊員は装備を軽減して飛行性能の向上を図り、愛機とともに突入する戦法を採ったのである。こうした特攻は首都防衛の重責を担う空中戦士としてやむにやまれぬ熱情の発露であって、戦後とかくの批判とは発想の次元を異

にするものである。忠臣楠氏にあやかって機体に大きく赤いあずさ弓を画いた震天制空隊員の姿は、正に生ける英霊であった。この生ける英霊にしてなお且つ突入の好機捕そくは容易なわざではなかったのである。

次に広瀬少尉のB―29編隊体当たりを述べる。

広瀬少尉は仙台師範卒業の特操士官だったと記憶しているが、技量は未だ成熟者にはなっていなかった。当時敵機は南方洋上を富士山に向って来航し、ここから東又は西に来襲するのが常例となっていた。昭和20年2月19日レーダー警報により広瀬機を富士山方面に先行偵察させたのであるが、「B―29敵編隊発見、ただ今より突入する」との電話報告を最後に連絡が絶え、未帰還のため戦況不明のまま当日は経過した。翌日大月附近の山中に敵機とともに墜落しているとの現地からの情報により死体を収容した。戦闘状況は不明であるが、東進に転じた敵編隊と略同高度で遭遇し、体当たり突入の絶好機を発見して一気に突入を決意断行したものと判断される。同時刻ころ師団長吉田喜八郎中将は、司令部屋上において電話を傍受し、感激しばし、めい黙されたときいている。即日二階級特進金鵄勲章受賞の栄誉に浴した。

また、この日には同戦隊の山田健治伍長も体当たりしている。それらに関し「帝都防空戦記」（同戦隊原田良次著）には次の通り載っている。

山田健治伍長機の体当たり

第53戦隊の山田健治伍長は、2月19日、四三〇青木少尉の率いる屠龍第四次震天制空隊の一員として出撃し、東京湾上空の空域にむかった。東京上空を西方より高々度で東進するB―29、12機編隊を発見、追跡し、足立区上空でその編隊左外側二番機に、真正面から突入、体当たりを敢行した。B―29は真二つとなり墜落し、一方、山田機は黒煙をはきながらキリモミ落下し、遂に火ダマとなり、足立区北鹿浜町（現鹿浜）に墜落した。

山田伍長の日誌には、次のように記されていた。

君のため何か惜しまん若桜
散って甲斐ある生命なりせば

わが陸軍特攻隊員として選ばれる。ああ、なんたる栄光ぞ。男として生まれたる歓びを感ず。

快なるかな体当たり

震天隊陸軍伍長　山田健治22歳

同伍長が属する特攻隊の残された三人―青木少尉、飯岡軍曹、田上伍長―は同夜、語る言葉も少く、心の奥でじっと考えているふうであった。

広瀬機の体当たり

特別操縦見習士官一期生出身の広瀬少尉は、第四小隊長として三機の僚機を従えて、一三五〇米で待機中、14時40分頃富士山西方より高度約八三〇〇米で東進するB―29、12機編隊を発見、直ちに攻撃開始を指示し、後上方より攻撃、第一編隊二番機を撃破した。

広瀬機は、反転離脱したとき、敵の第二編隊八機が、大月上空西方に追ってくるのに気づいた。然し同機の弾丸は既にうちつくしていた上に、右エンジンが敵弾を受け、白煙を噴きはじめていた。

今はこれまでと、富士山上空で右急旋回し、河口湖上空より敵機に向い直進しつつ、同乗者に「加藤、体当たり」と叫んだまま、第二編隊外側三番機目がけていった。加藤伍長は機上無線の電鍵を押しつづけ「広瀬機ただいまより体当たり」と絶叫した。加藤伍長の眼には、いっぱいにひろがるトタン屋根のようなものが、飛込んできた。グウァーンという、空気をひきさくような轟音と、強い衝撃を感じたのは同時であった。同伍長の記憶はここで切れている。

当時、山梨県北都留郡小菅地区で、この瞬間を目撃した住民は、B―29編隊の一機が「ここから南の空でパッと、マッチをすったほどの大きさに発火したのが見えた」と話してくれた。そのマッチの火は見る見るひろがり、やがて編隊を離脱し、急速に高度を下げ、遂には紅連の焔となって、都留郡

西原方面に落下してゆくのが認められた。

加藤伍長は激突時の衝撃で、失神して空中に投げ出されたが、落下中に幸運にも携行落下傘が自動開傘し、無意識のまま、接地寸前三かかえもある大木の梢に支えられ、着地した。そこは都下西多摩郡であった。

広瀬少尉はB―29とともに落下した。そのときの状況は、都留郡上野原警察署、西原巡査駐在所の渡辺神江巡査（当時26歳）が「現認証明書」にまとめている。

以上の二件のほか、同戦隊ではこれより先の19年12月3日に沢本政美軍曹が、また12月27日には渡辺泰男少尉がそれぞれ東京上空で体当たり撃墜として戦死している。

○常陸教導飛行師団特攻記録

「天と海」抜粋

本書の全容は本土上空でB―29に体当たりした同師団ゆかりの戦士の記録も含まれている。そして同書には未公開の貴重な史料がある。

四宮徹中尉―56期―について

第244戦隊の四宮徹中尉が、19年12月3日午後、来襲B―29に三式戦をもって体当たりを敢行した後、片翼で飛行場に帰還した。

「天と海」には同中尉の12月3日の日誌が、次の通り述べられている。

＊　＊　＊

十二月三日、午後、敵B―29七十機来襲。数編隊ニワカレテ進入。撃墜十六機、不確実七機、撃破二十機。（中略）

然レドモ、今少シ優秀ナル飛行機デ、更ニ多数機ヲモッテセバ、敵ノ野望ナド、一挙ニ撃破スルモノヲト残念ナリ。予、一四・六、及ビ一四二四共ニ敵七機編隊ニ対シ、同高度側方体当リヲ実施スルモ不成功。

ツイデ一五二四、高度九五〇〇米ノ敵五機編隊ノ最外側ノ一機ニ一万米ヨリ突込ミ、同高度直前方体当リ攻撃実施、激突瞬前、機体ヲ右ニ傾クレバ、左翼ピトー管ヨリ先、敵ニ衝突折損、飛行場ニ不時着ス。

同機ハ爾後、白煙、ツイデ黒煙ヲフキ、東京湾上ニテ小松大尉殿ニ撃墜セラレリト。

＊　＊　＊

尚、四宮中尉は第11振武隊長として20年4月29日23時30分、知覧を発進し、沖縄周辺洋上の敵艦船に突入、戦死した。

高山正一少尉―57期―について

第244戦隊の高山正一少尉は20年1月9日、立川市砂川上空を八千～一万米においてB―29に体当たり撃墜、落下傘降下により生還し、武功章を授与された。

同少尉は次いで1月27日、銚子沖50粁洋上において再びB―29に体当たり撃墜して戦死。感状を授与された。

その時の状況を目撃した、常陸教導飛行師団飛行隊の鈴木竜夫曹長は「天と海」に次のように述べている。

昭和20年1月27日、この日も私は命により出動し、関東平野上空で、編隊をくずして逃走中の三機のB―29を発見し、このうちの一機に対し前上方から一撃を加えた後、反転し後方から追撃に移った。後方からなので、距離はなかなかつまらず、いつの間にか海上に出ていた。

と、その時、キラリと銀色に光った物体が、突然私の機の右前スレスレに上空から垂直に突っ込んできた。

「アッ」

と思わず声をあげ、ヒャッとすると同時に、愛機を左にひねって回避しながら、落ちてゆく物体を見て、思わずガク然とした。

丁度、左下二千米位のところに、もう一機、B―29の巨体が眼に映り、その真上から今スレちがった飛燕（三式戦）が、一直線に急降下しつつあったのである。

飛燕はB―29の右翼付け根附近に命中したかと思うと、ひとかたまりの火の玉となり、B―29も大きく右に傾き、最初ゆっくりと右に一旋回したが、やがて錐揉みに入っていった。

十数秒後、海面に激突、大破すると同時に、海面一帯火の海となり、黒煙は千米にも達するかに見えた。場所は銚子沖合数十粁と記憶する。

後で聞いた話と照合すると、これが高山正一大尉の体当たりではなかろうか、と推察している。

小林雄一軍曹―少飛10・操縦

鯉渕夏夫兵長―少飛14・通信

両名は常陸教導飛行師団、第二教導飛行隊に属し、20年1月27日船橋上空において二式複戦をもって、B―29に体当たりを敢行、敵機と共に印旛沼に墜落、戦死した。

小林機の体当たりにつき、鈴木正敏氏（少飛15期、当時常陸教導飛行師団勤務）は「天と海」に次の通り述べている。

小林・鯉渕両先輩B29に体当たり

少飛15期　鈴木正敏

昭和二十年一月二十七日午後一時半ごろ、雲もまばらな水戸の空に、「キ―四五」＝二式複座戦闘機＝が舞い上がった。

「悠久の大義に生きる」「武士道とは死ぬ事と見つけたり」

これは、此の二式複戦の操縦者・小林軍曹（少飛10期）の口ぐせであった。

私は、昭和十九年十月一日、ここ水戸東方約十粁の常陸教導飛行師団に所沢整備学校から転じ、教育を受けながら実戦機の整備に当たっていた。機体は、整校在学中に整備演習にいった飛行第五十三戦隊と同じ「キ一四五改丙」で、既に二ヶ月余の経験もあり愛着をおぼえる機種のため、自信をもって整備にあたっていた。そのうえ、搭乗者が、少飛の先輩小林軍曹であり、同乗者は、十四期の鯉渕夏夫兵長であったので、なお一層の張り合いがあった。

小林軍曹は、こと軍務に関しては非常に厳しい人であったが、憩いの一ときは、我々後輩と翼下に寝そべって腕相撲に興じたり、夜は先輩の部屋で航空糧食を頂きながら、四方山話に時を忘れるという、ほんとうの兄弟のような日々が続いたのであった。

十九年十一月ごろになると、マリアナ基地からのB29による東京空襲が始まり、戦局がますます厳しさを増し、訓練もはげしくなってきた。

小林軍曹は、少年時代から「葉隠」の信奉者で、はじめに書いた「武士道とは死ぬことと見つけたり」を、話の折々に言って居られ、また「悠久の大義に生きるんだ」と、小柄な体をふるわせんばかりに、声を押し殺して言われた当時の姿は、まことに頼もしい限りであり、いまだに瞼に浮かんでくる。鹿島灘にほど近い常陸飛行場で、太平洋の方を睨んで言われたこの言葉は、はるか彼方のマリアナ基地にたむろするB29にたいし、期するものがあっての言葉だったのだと、あとになってもしみじみと感じ、また、これこそ日本男児だと、わが胸をふるわせたものだった。

一方、十四期の鯉渕兵長は、長身で無口な非常に温和な先輩だった。一期違いのためか、先輩ぶらず小生のことを同期なみに扱ってくれたことをいまだに感謝している。体当たりの数日前の日曜日、外出で水戸の実家に帰られたが、お母さんが不在で会えなかったのが、本当に心残りであったろうと不憫でならない。

剛の小林軍曹、柔の鯉渕兵長、この絶妙のコンビが、一月二十七日昼すぎ、燃料弾薬すべて整備完了した愛機に近づいてこられた。いつもの様に、

「ご苦労」

と、胸をそらせ、肩の前あたりに手のひらを前に向けた先輩独得の敬礼とともに、翼の上に、そして操縦席に。

鯉渕兵長は、長身を折り曲げるように前かがみになりながら、

「ご苦労さん」

といいつつ敬礼をされ、機体の足掛けに右足をのせる。いつものことだが兵長のお尻を小生が押し上げる。これが最後の尻押しになるとも知らずに……。

緊急発進のため始動車を待って居れず、仲間と一緒にテンパ廻し、（注 転把まわし…慣性始動器のハンドルをまわすこと）左右両エンジンとも一発で始動、すぐに操縦席横に駈け上った私は帽子をおさえながら、小林軍曹のエンジンチェックを見守る。一通りの点検を終わると、「ヨシッ」の声でホッとする。敬礼をすると軍曹は目礼を返された。

翼をおりるとき後部座席を見ると、鯉渕兵長は無線機の調整に余念がない様子、急いで飛びおりて足掛けを押し込むと、すでに僚機は地上滑走をはじめている。機の前方に出ると、小林軍曹は待ちかねたように両手を開いて「車輪止めはずせ」の合図をしている。ただちに車輪止めをはずすと、両エンジンの轟音とともに砂塵をまき上げ、機体はゆっくりと走り出した。挙手の礼をおくると、小林軍曹はチラッとこちらを見てすぐに正面を睨んだように見えた。鯉渕兵長は右手を上げて応えてくれた。やがて滑走路を砂煙を立てて三機の「キ一四五」は離陸し、左旋回ののち東京方面の空に消えていった。

整備兵は、自分の機が帰ってくるまでは気持ちが落ちつかないもので、無事に飛んでいるだろうか？　接敵できたろうか？　故障だけはしないでくれ、と神に祈る気持ちで待っているものだ。しかし、その気持ちもむなしく、二時間、三時間と時は経過し、出動機はすでにつぎつぎと帰投したのに小林機は未だ帰らず、ただむなしく空を見上げるばかり。帰投した搭乗者に聞いても、広範囲の戦闘となったため判らないという。もっとも死を決して戦闘しているとき他機のことは判らないのは当然であろう。他の飛行場にも着陸していないという。そして、眠れぬ夜をすごした翌日、

「小林機はB29に体当たりをした」

という衝撃的な報せを受けたのであった。私は声も出なかった。

兄と慕い、また、精神的な師と仰いだ先輩が大空の華と散った、嗚呼……。

二十歳と十八歳の若桜が、後をたのむと、血に染めて逝った大空を仰い

で、熱い涙はとめどなく頬をつたって流れた。

その後は、ただ、「よし仇はうつぞ」とひたすら整備に打ち込んだものだった。

地上の防空部隊の某中尉の証言によると、小林機は千葉県船橋上空を八千メートル付近で、B29十三機編隊に単機で戦いをいどみ、先ず前方から攻撃したのち、後上方から突進し衝突して火を噴きながら急降下状態で墜落し、B29は酒々井町大字伊篠に墜落したとのことである。

戦後知り合った少飛十期の大里幾次先輩にこの話をしたところ、大里先輩は仕事をそっちのけで小林機の墜落地点をたずね歩き、国道16号のすぐ脇のくぼ地（八千代市神久保一二六）にある水田にその場所をつきとめ、墜落を目撃したその水田の地主・豊田さんの話をきくことができた。

小林機は、豊田さん宅の東方から火を噴きながら急降下状態で突っ込んできて、あわや豊田さん宅を直撃、と思ったとき、急に左旋回してすぐ脇の水田に突入したとのこと。翌日兵隊が来て、後部座席の兵隊さんを掘り起したが、操縦席の人は掘り出せず肉片を少し拾い集めただけで、そのまま機体とともにあの水田の中に眠っている苦だと指されたところには、朽ちかけた目印の棒杭が、水面から三十センチ程のぞいていた。

墜落地点には、B29搭乗員のヘルメットと飛行眼鏡が落ちていたのを収容に行った兵隊が確認しており、いかに激しい体当たりであったかを物語っている。

同年二月二十七日には、この体当たりにたいし、防衛総司令官から感状が授与され全軍に布告された。

大里先輩が墜落地点を確認された翌年の、昭和五十六年一月二十七日、両先輩の御霊安かれと、小林軍曹とは宇都宮飛行学校での特訓仲間だった大里先輩、全日空の吉池庄三氏、伊香保でホテル経営の木村七郎氏ら三人の十期生、ならびに、私と同期の小笠原七郎君らで、水田のほとりに桧の供養塔を建て、鯉渕兵長の御兄弟お二人にも御参加いただいて、三十六年目の命日に御冥福をお祈りした。

合掌

小林軍曹機 51年8ヶ月目の掘り起こし

鈴木正敏（少飛15期）

平成8年9月19日午前10時、暑い陽射しのもと千葉県八千代市神久保地先の水田には、掘削現場付近の要所に敷き詰めた厚い鉄板上に、鯉渕兵長のご遺族を初めこの工事の事業主体である八千代市の職員の皆さんや、施行業者の市原建設の人々・陸自不発弾処理隊・消防・警察・地元関係者・及び我々少飛関係ら多数が集まり、地元東福寺のご住職による安全祈願とここに眠る少飛10期小林雄一軍曹（戦死後少尉に特進）と少飛14期鯉渕夏夫兵長（戦死後准尉に特進）のご冥福を祈る読経に頭を垂れていた。

思えば遠い道程であった、昭和20年1月27日船橋上空でB—29に体当たり撃墜し、自らもこの地に爆機キ—45改丙（屠竜）と共に墜落壮烈なる戦死を遂げた両先輩、あの日私と最後の言葉を交わして飛び上がった常陸教導飛行師団の上空は雲の少ない好天だった。あの空の彼方に消え去った先輩をこれから掘り起こせると思うと万感胸に迫る思いであった、

『何でもっと早く掘ってくれなかったんだ』と言われている様な気がしてならない、『これには色々訳があったんですよ、許して下さい』と無言で謝罪するほか無かった。

戦後暫くの間は国民みな自分が生きる事だけに一生懸命で、他を顧みる余裕も無く心ならずも国に殉じた先輩・同期・後輩の慰霊をなおざりにした感があり、私もたまに靖国神社に参拝するのが精一杯であった。世の中が落ち着いてくるに従い同期会・戦隊会・少飛会等、同じ釜の飯を食った仲間達との絆が旧に復し、会合のたびに話しは戦死した英霊の事に行き着くのが当然の成り行きだった。そのなかでも鮮やかに思い出されるのがこの両先輩の事だった、体当りの翌日印旛沼の近くに墜落した事は聞いていたが、詳しい事はわからず探しようもなく気にしながらもその儘になっていた。昭和55年のある日趣味でやっていたフライトの合間に、同じ航空クラブ員の少飛10期生大里先輩にこの事を話した所、『小林雄一とは宇都宮で訓練の時同じグループで特に仲の良い奴だった、お前が最

後に見送ってくれたのか、よし俺がその墜落現場を探す。』と驚きながら言ってくれ、仕事柄千葉県の地理に精通して居る先輩が乗り出してくれた。それから間もなく『おいわかったぞ』との連絡があり、飛んで行くとその場所は国道16号島田台交差点のすぐ北側の窪地にある水田であった。

地主の豊田さんの話では、小林機は船橋方面から旋回降下しながら飛来して、最後は北西方向から火を噴きながら水田に突っ込み大音響と共に爆発炎上し付近の山林も延焼したとの事、そして一両日後、軍の手により首と手足の一部が無くなった一人の遺体や肉片が収容され、地表に散らばった機体の破片を持ち帰ったと言う事だった。あの杭の下に飛行機が有りますよと言われて水田を見ると、畦道から2～3メートルの所に朽ち掛けた丸太が30センチ程頭を出していた。これが目印であり、墓標であった。

墜落当時や軍による収容作業の目撃者数人から聞き取った結果、私は収容された遺体は鯉淵兵長だけで、小林軍曹は後ろに背負った形の20ミリ上向き機関砲2門に押潰された格好で、地中深く眠って居ると確信した。

外地の激戦地ならいざ知らず東京と目と鼻の先にある国道のふちに、先輩の遺体が愛機諸共数十年もその儘になって居る、こんな事で良いのだろうか？　今まで各地の慰霊祭に何十回出席しただろうか、形どうりにただお参りして直会でお酒を飲んで、…それだけが慰霊だろうか。

感状上聞に達した英霊をあのままにして置いて…。

一生懸命慰霊行事に心を遣い、また参加されて鎮魂の誠を捧げておられる方々には申し訳無い事だが、その時は早く掘り起こして上げたいとの一心で本当にそう思った。

私の目の黒いうちに必ず掘り起こして上げようと心に決めて、関係する方々や各団体に話しを持ち込んだが前途には色々の難題が有った。

(1) 小林軍曹のご遺族には遺骨が渡されて居り、遺族もそれを身内の遺骨と信じ長年にわたり供養をして居り、今更これが本当の遺骨ですと言ってもご遺族が納得してくれるか？

(2) 水田を広い範囲にわたり深く掘った場合、作柄が復旧するまでにかなりの年数を要するが補償をできるか？

(3) 掘削用重機を現場にいれる広い道路がない。

(4) 数千万の費用を調達しなければならない。

一つ一つ解決しようと、遺骨が出た場合の方策に就いて一つの案が浮かんだ頃強力な援軍が現れてくれた。教育隊時代の同区隊員で佐原市在住の増田克己君が私の話しを聞き、平成4年秋ころから積極的に動き、元県会議長の田中昭一氏（現衆議院議員）にも要請してくれ、この件は・市を動かす問題となり、不発弾の件もある事で話しは急展開する事になった。

その間厚生省に対しても交渉したが、『両名に就いては遺骨も渡し昭和23年5月に葬祭料も支給済となっているから処理は全て終わっている』と、つれない返事。

また埋蔵金発掘を扱ったテレビ局も『ロマンも収入も無いから駄目』と素っ気無い。その後紆余曲折もあったが平成7年になり、八千代市役所から『今後大きな工事があり重機が近くに入った時には試掘をする様に手配をする』との報せがあり、更に待つ事1年有半。

平成8年9月3日待望の良い報せが、八千代市役所→増田克己君経由で私の所に飛び込んで来た。『9月19日（木）午前10時から小林軍曹機の発掘作業を開始致します』市で行う水田基盤整備事業の一環として、この機会に埋没して居る機体等の発掘を行い、関係する方々の心の整理を計る。と言う有り難いお言葉である。後は大里先輩が一番心配されているご遺族の心情である。

やがて9月19日冒頭に述べた如く、供養の後2台の重機により掘削が始められた。既に磁気探査で概ね場所の特定が出来ている為、2～3メートル掘った頃から、ばらばらになった部品が次々に上がってくる。

バックホウで掘ったりスコップで手掘りをしたり、場所が水田であるため、広範囲の現場周囲に無数のパイプを打ち込み水を吸い上げているが、湧水も多く泥濘の中で作業員も悪戦苦闘だ。泥だらけの残骸を引き上げると、傍らでは他の作業員が水で洗浄する。エンジンが出た、根元から折れたプロペラがあった、続々と残骸が出てくる、いずれも原形を止める物は無い無残な姿である。20日午前20ミリ上向機関砲が出た付近から遺骨が出て来た。私は作業員から手渡された遺骨の土を丁寧に落としながら、思わず『小林さん』と声を掛けてしまった。細かく割れた頭蓋骨・綺麗な奥歯がついた下顎骨の半分・肋骨・脊柱・大腿骨・脛骨等、全数ではないが、ほぼ全身の骨を操縦席と思しき場所から収容する事ができた。遺骨をビニールの袋にいれ箱

に納めて、しばしの間涙の合掌でその場を離れる事が出来なかった。少し離れた所からは鯉渕兵長の名いりの飛行長靴が出土両足共骨が入ったまま上がって来たが、残念ながら頭蓋骨は無かった。

機体の残骸も次々に上がりエンヂンも2基、日の丸のはっきり判る胴体、機体番号の4065が消えずに残ったフラップ、尾輪や尾灯部分の胴体最後部、油漏れに苦労したクーラーも、総て潰れてはいるが当時を思い出させるに十分な物ばかりであった。

9月25日までに広い範囲に及んだ発掘作業も、6～7メートルの深さまで掘って磁気探査をしても、金属の反応なしと言う事で掘削を終了し、遺骨のあった機体の主要部分には新しい砂を敷き詰め、その上に掘り出した土を埋め戻すと言う暖かい心遣いで10月上旬に全作業を無事に終了する事が出来た。

気になっていた小林軍曹のご遺族も、間違いなく本人の遺骨である事が判り、わだかまりも解消され快く遺骨を故郷に葬って下さる事になり、10月30日現地にて、両先輩のご遺族や市長も出席されて慰霊の式を行い、総て皆が満足出来る状態で発掘工事を終了する事が出来た。

式後少飛会から小林機墜落以来今日まで供養を続けて下さった地主の豊田とみ様と、今回の掘り起こしに就いて多大の後援をして頂いた田中昭一様に、感謝状を差し上げて労をねぎらい散会した。

なお3トン余りの残骸は展示出来る物を選び靖国神社遊就館と航空自衛隊入間基地の修武台記念館に永久保存・展示して頂くよう折衝している。

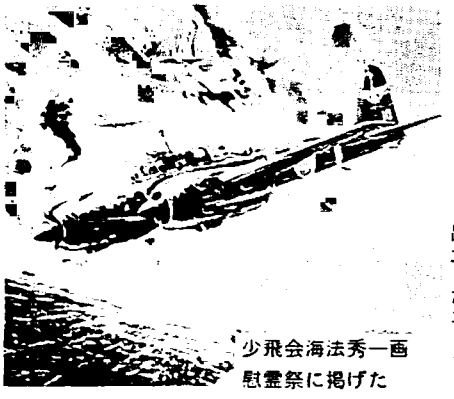
末尾で失礼ですが、八千代市役所の皆様には、本事業決定以来大変にお世話になり、無事収容作業を完了して頂きました。私ども少飛関係者一同深く感謝申し上げ厚く御礼申し上げます。

また同期の増田克己君が諸事万端に亘り手回し良く進行してくれ、彼がいなかったら此の発掘は出来なかったと痛感して居る、増田君ありがとう。

これで私の戦後もやっと終りを告げる事になった。

合掌

出土したエンジン



少飛会海法秀一画
慰霊祭に掲げた

八千代市当局に対し、我が特攻協会としても敬意を表し感謝申上げます。

機体と共に半世紀地中に埋もれていた英魂に捧ぐ

田中　賢一

○体当りせし人二十と十八と
　聞きて胸打つ　老残のわれ
○ひさかたの天翔けり行け君が魂
　老ゆることなき齢なりせば
○五十年を泥に埋まりしなきがらよ
　魂目覚めつつ　何見給ふや
○国思ふ心失せ果てあさましく
　うつろひにけりと告ぐる苦しさ

掘起しに執念を燃し遂に悲願を達成した少飛会に敬意を表し
○亡き友の心を思ふ一筋に
　やまと心の　残り火ぞ見ゆ

小林・鯉淵二軍神に捧げる歌

一、印旛の里に天高く　魂還りゆく秋の空
　敵撃摧の闘志秘め　潜みし臥龍五十年
二、虚空を走る天龍か　紫電閃めく迅雷か
　耿き心の　一筋に　驕敵の翼摧け散る
三、胸に刻みし葉隠の　訓のままに身を挺し
　肉弾粉と砕くとも　武夫の道揺ぎなし
四、干戈の響　夢の跡　憶いも深し空の友
　捧ぐ二輪の菊の花　薫る　少年飛行兵

註　小林雄一軍曹は日頃「葉隠」を座右から離さなかったという。
　小林軍曹は少飛10期、鯉淵兵長は少飛14期だった。

マリアナB―29の基地に対する陸海軍の経空攻撃 ④

第一御楯隊記事補遺

前号の「B29基地マリアナに対する陸海軍の経空攻撃③」として第一御楯隊のことを記述したが、誘導に任じた彩雲の搭乗員で現在唯一人の生存者である西村友雄氏から「第一御楯特別攻撃隊の全記録」と題する70ページの書物ができたと寄贈を受けた。

実は前号に引用した資料は防衛研究所戦史部に保管されているもので、昭和49年にやはり西村氏が調査記述されたものである。従って前号掲載分と内容的に重複しているものは割愛し、ここに補遺として同氏の了解のもと転載する。

サイパン銃撃作戦後記

母の手元に帰還した大村謙次隊長の遺骨

―以下2章に亘る記述部分は秦郁彦氏の記述と要約である―

昭和28年、厚生省は戦後最初の遺骨収集船日本丸を旧南洋群島方面に派遣した。サイパン島に寄港した時、復員局の富士信夫事務官は、アギガン墓地に葬られていた日本兵の遺骨発掘に立合った。その時、ある墓標の両側に英文の埋葬記録を入れた青いガラス瓶が立ててあるのを見つけた。その記録には、葬られている日本兵の名が「Lt. Kenji Omura」と記入されていた。しかし、持参した戦死者名簿には該当者がない。そこで同行していた中島親孝復員局業務課長は厚生省宛身元割り出しの手配をした。

持参した戦死者名簿はサイパン島に配備されていた陸海軍の地上部隊のもので、それに該当する者がいないとすれば、或は同島の攻撃に参加した航空部隊員ではないか、と判断した厚生省の調査で、遺骨の身元は第1御楯特別攻撃隊の大村謙次中尉と判明した。

遺骨を安置した日本丸が竹芝桟橋に入港したのは昭和28年3月19日であったが、知らせを受けた大村中尉の母上キヌさんと次兄行雄氏が出迎えた。遺骨を受け取ったキヌさんが大村謙次中尉であると確認したのは、奥歯にあった金冠の位置を母上がはっきり記憶していたからである。

敵飛行場に強行着陸した大村隊長

大村隊長の遺骨が米軍の手で丁重に葬られていたのは、その勇敢な行動が米軍兵士に感動を与えたからであった。

④ その状況は秦郁彦氏の調査によって明らかあり、雑誌「航空情報」（昭和57年1月号）に掲載された同氏の「サイパン島のB―29を焼打ちせよ」―大村謙次中尉秘話―に詳細な記述があるので、その要約（大部分はそのまま）を次に紹介する。

1980年秋、コロラドスプリングスの米空軍士官学校で開催された米国軍事史学会に出席した私（秦郁彦氏）は、その席上で、かってB29の東京初空襲を指揮したヘイウッド・ハンセル少将（当時准将）と対談することが出来た。そして、第1御楯特別攻撃隊の攻撃に関する私の質問に対し、

「1944年11月27日、そうあの日の事はよく覚えていますよ」、将軍は淡々と語り始めた。「美しく晴れ上がった空でした。正午少し過ぎ、オドンネル将軍と一緒に昼食をすませて外へ出ると、超低空を不規則に飛んでいる飛行機を何機か見かけました。また海兵隊の戦闘機が規則違反の曲技飛行をやっているな、注意しなくちゃあ、とオドンネルが舌打ちしているところへ、奴らがB―29の銃撃に移ったのです。あわててモンゴメリ参謀とジープに飛び乗って、私は飛行場へ向かう坂道を走りました」

①イスレー飛行場のB29

41才のハンセル准将が第21爆撃兵団司令官に任命されて、自ら操縦するB29で、サイパン島のイスレー（旧アスリート）飛行場に着陸したのは1944年10月12日だった。

東京爆撃用の基地として、工兵隊が昼夜兼行で続けた突貫工事が概成したのを待ちかねるようにしての進出である。

計画ではサイパンに2、テニアンに2、グアムに1、計5か所の大飛行場を造成して約1千機のB29を展開する予定になっていたが、珊瑚礁を砕いて地盤を固め、厚い滑走路、誘導道、駐機場、道路、燃料庫、兵舎などを揃えるのは予想以上の難工事となった。

サイパンの場合も長さ8千500ft（約2千600m）、幅200ft（約60m）の滑走路を6本敷く予定だったが、2つ目のコブラー飛行場は地盤不良のため、工事を縮小して中小型機用の滑走路1本にとどめ、代わりにテニアンの規模を拡大するよう変更された。

滑走路の工事さえ遅れがちだったから、居住施設の整備までは手が回らない。続々と到着するB29の搭乗員、整備員は、訓練の合間を縫って飛行場台

地の下に粗末なカマボコ兵舎やテントを造成して雨露をしのいだが、雨季の暑熱と湿気に悩まされ、蚊軍の襲撃に悲鳴をあげた。

そのうち、B29の進出を察知した日本の空軍が、ゲリラ的な夜間空襲をかけてきた。最寄りの硫黄島からでもサイパンまでの距離は600nm（約1千100km）ある。戦闘機の随伴は困難だったから陸軍の重爆と海軍の一式陸攻が深夜を狙って来襲した。11月2、6日にそれぞれ十数機が攻撃してイスレー（アスリート）飛行場に銃爆撃を加えたが、暗夜の目視攻撃だから効果は不十分で、米夜間戦闘機の迎撃と対空砲火の反撃で、そのつどかなりの未帰還機を出した。

そこで木更津に司令部を置く海軍の第3航空艦隊は、ゼロ戦隊による昼間銃撃を計画した。無理を承知のしかも銃撃だけでどの程度の効果をあげられるか疑問はあったが、B29の東京空襲は必至という切迫した情勢下で打つべき対抗策は他になかった。

一方、米軍の方でも1日も早く東京初空襲をかけようと、必死で出撃準備を進めていた。滑走路はイスレー飛行場の1本しか使えなかったが、ハンセル将軍は第1撃を11月17日に予定した。しかし悪天候が続いて順延され、決行は24日に延びた。

この日の朝、110機のB29はオドンネル将軍の指揮でイスレーを離陸、94機が東京を爆撃した。主目標の中島飛行機工場は雲に覆われていたため、爆撃精度は悪かったが、日本戦闘機の反撃は微弱で、自信をつけたハンセルは東京第2撃を3日後の27日にセットする。

予期した事とは言いながら、B29の東京来襲は改めて日本側を衝撃した。反撃は急を要する。16日に編成したゼロ戦の挺身攻撃隊は館山基地で実況を想定した猛訓練に明け暮れていたが、訓練未了のまま、3航艦は直ちに硫黄島進出を下令した。

11月26日、大村謙次中尉の指揮する252空戦闘317飛行隊のゼロ戦52型丙12機は、誘導の高速偵察機「彩雲」2機とは別行動で館山基地を出発、硫黄島へ飛んだ。見送りを兼ねた3航艦長官寺島謹平中将以下のスタッフも一式輸送機で同行した。

硫黄島へ降り立った時、寺岡中将の子息でイ―45潜水艦に乗り組んでいた恭平中尉戦死の電報が届いている。

サイパン焼打ちは翌27日に予定されていた。B29の第2撃と重なれば、すれ違いになるが、日米双方ともまだその暗号に気づいていなかった。

②着陸したゼロ戦

筆者（秦郁彦氏）が第1御楯特別攻撃隊の調査に手を染めたのは、昭和53年の末であるが、最後まで難航したのはイスレー飛行場に着陸した大村中尉の戦死状況に関する米側の確認情報だった。55年秋に渡米した筆者は米空軍、陸軍、海軍、海兵隊の各戦史部を回って、当時の戦闘記録を探した。

手がかりにしたのは「墜落するゼロ戦から落下傘で飛び出したパイロットが、着地するやピストルを抜いて射ち始めた。黒人の海兵隊員がカービン鉄でこの男を射殺した」と報道したニューヨーク・タイムスの記事（1944年11月29日）である。

しかしゼロ戦隊を迎撃した米戦闘機隊の報告書は見つかったが、着陸したパイロットの行動に関する公式記録は、米側の熱心な捜索にも関わらずまだ見つかっていない。ここでは入手出来た限りの記録と、既に紹介したハンセル将軍の手記及び談話によって、大村隊の勇戦ぶりを再現してみたい。

11月27日、サイパン島の米兵は、真夜中から空襲警報でたたき起こされた。陸軍の4式重爆「飛龍」3機が00：07から夕弾と機銃掃射でイスレー飛行場を奇襲したのである。僅か数分で日本の爆撃隊は風のように去り、米側も被害はなく、裸足で逃げ出した多数の米兵が足を傷つけて手当てを受けた程度であった。ところがやっと寝つくと、今度は東京爆撃に向かうB29の出撃に起こされた。

ゼロ戦隊の来襲で2度目の空襲警報が発令されたのは昼食時間の12：43（日本軍の東京時間13：43に相当）頃だったようである。島の防空は海兵隊の担当になっていたが、丘の上に据えつける予定の大型レーダーは、箱詰めのまま放置され、まだ作動していなかった。そのうえゼロ戦隊が100～300ft（約30～90m）の超低空で接近したので、完全な奇襲になった。

高度1万1千ft（約3千050m）で上空哨戒に飛んでいた数機のP47が、慌てて急降下し、機銃掃射中のゼロ戦に飛びかかったが、慌てて撃ちあげる味方の対空砲火に巻き込まれ、マッコール中尉機が被弾墜落している。

戦闘機隊が離陸を開始したのは、銃撃が始まった後で、迎撃はほとんど間に合わなかった。米側は来襲したゼロ戦を13機又は15機と推定したが、対空砲火で10機、第318戦闘機グループのP47で4機を撃墜したと報告している。4機のうちの1機は別記のように彩雲2番機と思われ、2機はパガン島まで追跡した2機のP47が着陸中のゼロ戦

（松下武男兵曹機と明城哲飛長機）を撃破した戦果となっているから、未帰還のゼロ戦はほとんど対空砲火の犠牲になったわけである。

AP通信のバーン・ホーグランド記者は、観戦中に少なくとも5機のゼロ戦が海中又は地上に燃えて激突するのを目撃した。

さてハンセル准将がジープで飛行場へ登る坂道を上がってきたのは、ゼロ戦隊が銃撃を繰り返している最中だった。そのうち1機が正面から接近してくるのを見たハンセルは慌ててジープを停め、隠れ場所を探したが見つからない。仕方なく棒立ちになって見ていると、ゼロ戦は滑走路に着陸してしまった。

そして飛び出したパイロットがピストルで近くの米兵と射ちあい倒れるのが400mばかり向こうに見えた。そのうち駐機場のB29が焔と黒煙を吹き上げた、と将軍は回想し、「彼らは撃墜されるまで銃撃を止めなかった」と筆者に語った。

③母の祈り

大村隊のゼロ戦が上げた戦果は資料によってまちまちである。米空軍公刊戦史はB29の全壊3、大破2機と記しているが、この数字が最も正確に近く、他に相当数の被弾機があった、と推定される。いずれにしても、12機（松下機を含む）のゼロ戦と1機の彩雲を失った代償としてはこの戦果は高価に過ぎた。二度と同種の攻撃法が採用されなかったのはその為だろう。

B29の主力が出動した留守にかち合ったのも不運であった。50機前後が在地していたとはいえ、駐機密度は落ちるから、銃撃効果は著しく減じたはずだ。

生還を期せず、銃弾がつきるまで戦う覚悟で飛来した隊員の心情を思えば、その悲運に涙なきを得ない。米側記録は彼らが少なくとも3撃を試みた事を記している。

それにゼロ戦の突入時刻は予定より1時間遅れていた。戦果偵察の彩雲が30分待って空しく引き上げたのも、この遅れに起因する。理由はいくつか考えられる。

超低空飛行で逆風を受ければ、飛行速度は大幅に低下する。マリアナ列島線の島々をかすかに視認しつつ飛ぶ計画ではあったが、遠方の島々を特定するのは容易でない。経験不足の大村隊長に水上機出身のベテラン小野飛曹長を配したのは、航法ミスを懸念しての配慮であったろうが、米側記録はゼロ戦隊が南方から襲撃してきたと記しているから、彼らは行き過ぎた後引き返したのではあるまいか。

そうだとすれば、帰路の燃料は絶望的である。どうせ帰れないなら20㎜砲を射ちつくすまで戦おう、と彼らは決意を新たにしたであろう。では大村中尉はなぜ滑走路に強行着陸したのだろうか。

この場合、タイムス紙が伝える落下傘降下は誤聞と断じてよい。ハンセル将軍は着陸を目撃しているし、パイロットは負傷しているように見えなかった、と語っているからである。全弾を射ちつくしたのち、なおもB29の爆破を志して降りたのか、機体に被弾して不時着の形になったのか、今となっては断定しがたいが、出撃の前夜大村中尉と二人だけで語り合った島田茂久（旧姓森）は、その時強行着陸の決意を聞いた気がする、と述べている。

このパイロットが大村中尉であった事を証拠づける記録はないが、埋葬の状況、富士、島田両氏の得た情報を総合すれば、ほぼ間違いないと思われる。

ともあれ、最初から強行着陸を狙った沖縄戦の義烈空挺隊など数例を除くと、それは太平洋戦争を通じて唯一の敵中着陸であった。

大村謙次中尉は大正11年7月、静岡県田方郡中郷村（現三島市）に生まれた。父は弟子を数人抱えた大工の棟梁で、男6人、女4人の子沢山だった。豊かではなかったが、貧しくもないごく平均的な庶民の育ちである。

幼い頃は2度の大病をやってひ弱な方だったが、成長するにつれて丈夫になり、県立韮山中学校を経て日米開戦の前年、海軍兵学校に入った。小学校6年を通じて全甲の成績で中学校も首席を譲らなかった。

叔父の吉田定雄氏（志願兵出身の海軍特務中尉）は「いつも温和でにこやかで、怒るのを見た事がない。親思いの子で軍人向きとは思えない優しい子だった」と語る。

この世代は物心つく頃に満州事変を迎え、引き続く戦争のさなかに育った。平時なら詩人や会社員になっていたであろう子も、こぞって軍人を志望した時代であった。

「謙ちゃん」の愛称で誰からも好か

大村中尉

れたおとなしい少年が、海兵、戦闘機パイロットという最も男性的なコースを選んだのも、こうした時代風潮のせいであろうか。

中でも戦時下に江田島を巣立った海兵72期生の前後は、最も純粋培養された世代だと言われている。事実、特攻隊の中心を占めた海兵出身者は、このクラスであった。

大村中尉は出撃に際して遺書に類するものは何も残していない。千葉市に在住の母方の叔母の家に寄って「叔母さん、髪を刈って下さい」と頼んだのが、後で思えば別れの挨拶だったという。

昭和55年三重海軍航空隊跡に建設された若桜福祉会館に、大村中尉の母キヌさんが第一御楯隊員（住田広行一飛曹）の遺族に送った手紙が保存されている。日付けは昭和20年6月8日となっているので、新聞公表の直後に慰問を兼ねて送られたものだろう。

その一部を次に紹介しておきたい。

「（前略）私こと昨年11月27日神風特別攻撃隊第一御楯隊として南方方面に出撃の拝命仰せつかり遂に帰らぬ護国の鬼となりました大村謙次の母でございますが、はからずも行を共になされました御尊家住田広行様の壮烈なる戦死誠にお慰めの言葉もございません。

御決意の程深く感謝致すと同時に隊長として格別に指導も又働きも出来ずにしまった事、謙次に代わって御詫び致す次第でございます。―（中略）―

一度お訪ねしてお礼やら少尉の御日常等承りたく存じて居りましたが、戦局の苛烈な今日それも出来ませず非常に残念に存じ、せめてもの心慰めにささやかな仏壇に隊員御一同をお祀り申し上げ毎日礼拝させて戴いて居ります。事起こりましてより既に半歳の月日朝に夕に思われ、またありし日の事でもそれにつけて皆様方への長い御無沙汰重ねて御詫び申し上げ、少尉の最大な御忠節に深甚の感謝を捧げて筆を止めます」

この手紙は巻紙に毛筆で書かれ、遺族の全員に送られたらしい。それは写経にも似た長い祈りの作業であったろう。

大村キヌさんは昭和50年3月4日82才の天寿を全うして没した。―以上―

その3か月前、脳出血で病臥中のキヌさんに、私（西村）から送った最初の「第一御楯特別攻撃隊の記録」を大村行雄氏が読んで聞かせ、「分かった？」との問いに、うなずかれたのがせめてもの幸せと思う。

サイパン特別銃撃隊の分離後の行動

サイパン特別銃撃隊が誘導した彩雲1番機から分離した後の行動は、その途中、不測の事故で行動不能となり、パガン島に不時着した松下武男一飛曹が滝沢謙司飛長に伝えた話でその一部が判明している。次にこれに関する滝沢氏の手記を要約し記述する。

彩雲1番機から分離した零戦隊はパガン島東方海上へ向けて高度を下げる。パガン島を確認して、大きく右旋回をする。高度1千m。全機が増槽タンクを投下する。更に高度を下げ、真南180度の進撃コースを突進する。やがてアラマガン島の山頂を確認し、そこから約60km離れた海上を超低空5mの高度でひたすら進撃する。

この辺りからもはや敵の制空圏内である。上空をしっかりと見張る。もしいま、敵戦闘機の奇襲を受ければ、この低空では絶望的である。しかし、我が戦闘機乗りは、劣位からの立ち上がりには自信がある。その時は目にもの見せてやる。そして、この役目は鴨番機である。1、2番機はかまわず目的のアスリート飛行場に突入する、というのが事前の打ち合わせである。

列機はそれぞれ上空の敵影を警戒しつつ、傘型の戦闘隊形をぴったりと組み、紺碧の海上をひたすら進撃する。

やがてアラマガン島の744mの山頂から右後方に移りかわって見えなくなろうとする時、突然、松下一飛曹機のプロペラがババンと海上の波頭を叩き、パッと猛烈なしぶきがあがった。松下兵曹は危機一髪で引き返す。しかしその直後、松下兵曹機はプロペラ先端の変形による猛烈な機体振動が起こり、飛行困難となった。このままでは列機の攻撃行動の邪魔になると判断した松下兵曹は泣く泣く編隊を離脱、パガン島に直行、穴だらけの滑走路に胴体着陸をした。

パガン島守備隊長の久米久良海軍大尉は、さきに彩雲2番機が投下した通信筒により、サイパン島攻撃後、零戦隊が戦果をあげて帰投する報告を受けた。そこで全守備隊員を動員して、連日の爆撃で穴だらけになっている滑走路を修理していたが、その時、松下兵曹機が滑り込むようにして胴体着陸してきたのである。

松下兵曹は頭を少し負傷したが、大事には至らなかった。そして松下機のガソリンを抜き、機銃の弾丸も抜こうと、守備隊銃撃小隊の鎌田兵曹が作業を指揮している最中に、「帰ってくる

ぞ」の声があった。

慌てて南方海上に目を向けると、高度200mで零戦が一機侵入してきた。機は大きく翼を振って味方識別を繰り返し、やがて不時着場の上空を斜めに横切って旋回した。鎌田兵曹は早く降りてくれ、と思ったそうである。

松下兵曹も、もうぼつぼつ帰ってくる頃だと思っていた矢先の帰投なので、狂喜して迎えた。しかしそれにしても零戦の様子がどうもおかしい。パガン島守備隊による必死の穴埋め作業も完全とはいえず、正常の脚出し着陸では穴に脚を取られ、ひっくり返るのは分かり切っている。

だが零戦は脚を出した。もう燃料はカラになっているはずだ。早く胴体着陸をすればよいのに、と松下兵曹はいら立った。その時である。北東の高度500mより40度の降下角度をもって、敵戦闘機P47サンダーボルト4機が襲いかかった。はるばるサイパンから追いかけてきたのだ。

一旦脚を出した零戦はこれに気づき、猛然と反撃に移ったが、間に合わず被弾、そのままパガン山北側の椰子林に突っ込み、沼地の前に激突した。しかし零戦は燃え上がらなかった。燃料が無かったのである。

守備隊の地上砲火が必死の応戦をする中を、松下兵曹は墜落現場に向かって気が狂わんばかりに走り続けたという。生きていてくれと念じながら、

戦死した零戦隊員は明城哲飛長であった。

悲運の松下武男一飛曹

松下武男一飛曹はその後、作戦輸送も兼ねてサイパン特別銃撃隊救出の為、12月14日の深夜密かにパガン島に到着した伊号366潜水艦に乗艦、28日横須賀に入港後、海軍病院で母上と面会したそうである。そして再び原隊252空に復帰した。

滝沢飛長は茂原基地で松下兵曹と再開、同じ無念の思いの二人は抱き合って痛恨の涙に暮れた。この時、松下兵曹は明城飛長の血染めのマフラーを滝沢飛長に手渡し、「お前は特乙出身だから、遺族の方に渡してくれ」と言いながら男泣きに泣いたという。

その松下一飛曹は、昭和20年2月16日、敵機動部隊の関東地区初空襲の際、その邀撃戦に出撃したが、東京上空の空戦で、無念にも亡き戦友の後を追うように散華した。

来襲した零戦隊に歓喜した サイパン島の日本兵

サイパン特別銃撃隊が奇襲に成功、乱舞するようにアスリート飛行場のB29に襲いかかった時、サイパンの山中で歓喜してこれを迎えたゲリラ活動中の日本兵がいたことを私が知ったのは、昭和50年代の中頃であった。

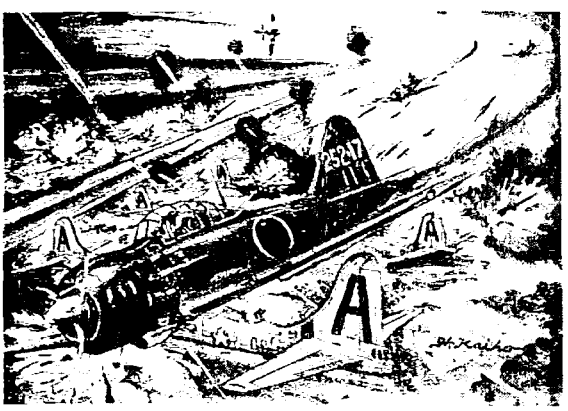
昭和19年7月7日、サイパン島の守備隊約3千名は最後の突撃を敢行壮烈なる玉砕を遂げたと大本営発表は報じている。従って、我が彩雲1番機が昭和19年11月27日、サイパン上空1万mの高空を飛んだ時、我々は眼下のサイパン島に、今なお戦いつつある日本兵がいるとは思ってもいなかった。

ところが玉砕を報じられた以後も、4千名以上の日本兵と邦人が島の各所に散在孤立していたが、彼等は日本軍最後の組織的攻撃も、サイパン玉砕の大本営発表も知らずに、友軍のサイパン奪還を信じて、その多くがゲリラ活動を続けつつ援軍の到着を待ち望んでいたのである。

これらの人々は、米軍による19年7月末からの部分的な掃蕩作戦、11月初めに始まった大規模掃蕩作戦で多くの戦死者を出したようであるが、それでも20年2月2日現在、ゲリラ活動を続けていた残存日本兵は約700名だったという。

その間の19年11月27日、サイパン特別銃撃隊の昼間攻撃で、超低空を乱舞する零戦隊の翼の鮮やかな日の丸を認めた残存日本兵達と収容所にいた日本兵・民間人は、いよいよ待ちに待った援軍がやって来ると歓喜を上げて喜んだが、残念ながらそれは果敢ない束の間の期待に過ぎなかった。

その間、零戦隊の予期しなかった奇襲に慌てふためいた米軍側の対応は混乱を極めたようで、収容所にいた民間人の証言によると、米軍戦闘機の中には味方の地上砲火によって撃墜されるものが認められ、その時ばかりは収容所の人達も喝采の歓声を上げたという。



少飛会海法画伯

誠36、37、38特攻隊員の寄せ書について

深井正昭
（特幹長岡会会長
前伊香保町長）

同特攻隊は昭和20年2月中旬の大刀洗陸軍飛行学校の教官・助教が主体で編成されたと思われる。第8飛行師団に所属したので台湾に向う予定だったろうが、一応銚子に集結し20年3月5日前橋飛行場に移動し訓練した。

3月10日頃誠37の隊長小林少尉は、関係ある役場等を訪問し物資調達の支援を要請した。同少尉は前橋予備士官学校出身の幹候7期から航空に転科している。3月14日当時の群馬郡清里村々長と農会長は前橋飛行場に誠隊を訪れ、物資調達の支援を行った。小林少尉の日記に感謝の記事がある。

3月18日誠隊の歌（作詩は小林少尉）作曲完成し、作曲家大中寅二先生を飛行場に迎え指導を受ける。椰子の実を作曲した人である。同日作曲家の歓迎と隊員の慰労をかねて、今生別離の宴を伊香保温泉越塚旅館（現在は伊香保ガーデン）で開いた。同旅館に集団疎開で寄宿生活中の東京王子第五国民学校の児童との交歓もあった。また旅館では人手不足の為、疎開児童の寮母たちが宴席の給仕を奉仕した。

沖縄方面急を告げ、誠の三隊は3月24日から26日にかけ九州の基地に移動し、4月6日新田原を発進し沖縄に出撃散華した。

以上各種戦史資料や小林少尉の日記等によって同隊の足跡を辿ってみたのであるが、私は平成7年1月小林少尉の日記全文のコピーを入手して読み始めたとき、まさか伊香保とかかわりがあるとは思いもよりませんでした。大刀洗で特攻隊員を拝命し、日を追って東に移動し、銚子から前橋に移り、3月6日頃の記事から榛名、赤城、前橋、高崎の文字が散見するようになり、3月18日「伊香保」が出てきたとき、一瞬ドキッとして「伊香保」の文字に釘づけになりました。まさか、伊香保温泉と特攻隊が関係あるとは、夢にも思わないことでした。

そしていろいろ調べているうちに、疎開学童たちとの交歓、寮母さんとの関連、高崎高女・前橋高女との繋り、飛行場周辺の人達との接渉など、僅か二十日間足らずの滞在でしたが、思出深い印象を残して飛立っておられることが判明しました。

寄せ書については、物資の調達で格段のお世話になった清里村農会長松島浅次郎氏に対し、感謝とお礼をこめて隊員一同で贈ったものと思います。終戦後は同家の土蔵の古い簞笥の中に眠っていたが、子息の松島昭氏によって発見され、大切なものとして表具屋に依頼し、半紙の染み抜き表装を行い、桐箱に収納、更に昭氏の住所である日野市高幡不動尊にて法要を行い、盆や彼岸には取出して供養しておられるという。私からの照会によってはじめて誠36、37、38隊員であることを知られたので、それまでは振武隊と思っていたそうです。

編者註　表装されたこの寄せ書は、昨年9月23日世田谷特攻観音年次法要の際、深井氏が持参し展示された。御遺族御存じの人は、このことを知らせてやって下さい。

誠　隊　歌

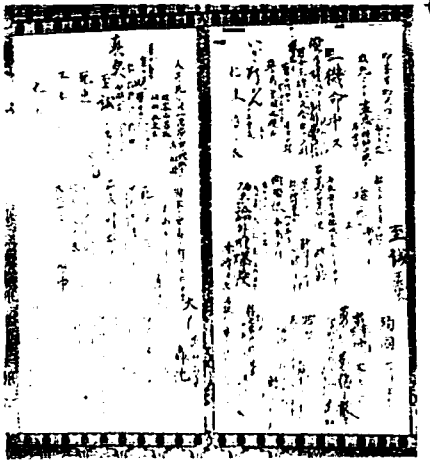
作詩　小林　敏男
（誠第三七飛行隊長）
作曲　大中　寅二

一、大和島根に　生を享け
　大刀洗にて　鍛われし
　我等一二の　若　桜
　特攻隊の　命を受け
　いざいざ征かん　誠　隊

二、御詔かしこみ　ひたすらに
　死に進み征き　顧みず
　我等いづくに　果つるとも
　あゝ神州は　不滅なり
　いざいざ飛ばん　誠　隊

三、七度生きて　皇国を
　守り抜こうぞ　同胞よ
　我等が大義に　殉ずるは
　今この時を　措きてなし
　いざいざ征かん　誠　隊

四、いかに仇艦　寄せくとも
　醜の神鷲　ここにあり
　敵　数萬を　道連れに
　沖縄沖を　血に染めん
　いざいざ突込め　誠　隊



寄せ書

現在靖國神社
遊就館所蔵

誠第36飛行隊（九八直協偵）

階級	氏名	出身県	出身別	生年	戦死日
少尉	北村　正	宮城	幹候9	大10	20・4・6
少尉	住田乾太郎	愛知	幹候7	大10	20・4・6
少尉	片山佳典	香川	特操1	大11	20・4・6
少尉	高嶋弘光	香川	特操1	大12	20・4・6
曹長	小川二郎	千葉	昭13	大9	20・4・6
軍曹	森　知登	和歌山	昭11	大9	20・4・6
軍曹	貴志泰昌	和歌山	少飛11	大13	20・4・6
伍長	岡部三郎	香川	青年航空団	大10	20・4・6
伍長	細木　章	島根	来9	大11	20・4・6
伍長	峰　保昌	長崎	印10	大12	20・4・6
軍曹	嶽山留次郎	滋賀	昭15	大9	20・4・16
曹長	下手豊司	広島	昭14	大11	20・4・27

誠第37飛行隊（九八直協偵）

階級	氏名	出身県	出身別	生年	戦死日
少尉	柏木誠一	東京	幹候9	大7	20・4・6
少尉	小林敏男	茨城	幹候8	大10	20・4・6

誠第38飛行隊（九八直協偵）

階級	氏名	出身県	出身別	生年	戦死日
少尉	佐々木秀三	岩手	仙11	大12	20・4・6
軍曹	小屋哲郎	鹿児島	昭14	大8	20・4・6
軍曹	藤沢鉄之助	岡山	昭14	大7	20・4・6
軍曹	玉野光一	山口	昭15	大9	20・4・6
軍曹	入江　寛	山口	少飛11	大12	20・4・6
伍長	赤峰　均	大分	米10	大12	20・4・6
伍長	百瀬恒男	長野	古11	大14	20・4・6
少尉	喜浦義雄	鹿児島	特操1		20・4・6
少尉	小野生三	大分	幹候9	大10	20・4・6
少尉	蕎麦田水行	栃木	仙12	大12	20・4・6
曹長	高橋勝見	岩手	昭13	大7	20・4・6
軍曹	水畑正国	長崎	昭13	大7	20・4・6
軍曹	石川寛一	千葉	少飛9	大15	20・4・6
軍曹	松井大典	奈良	少飛11	大13	20・4・6
少尉	宇野栄一	滋賀	特操1	大13	20・4・6

「陸軍航空の鎮魂」抜粋

新田原方面8FDの沖縄特攻

福澤丈夫（34）

私が特攻を指揮した経緯

昭和20年3月27日、8FD司令部付の私は、山本健児8FD長（28）の命を受けて、新田原飛行場に急行した。その任務は、中央から8FDに配属された特攻を速やかに沖縄飛行場に推進させること、状況により新田原飛行場に滞留する特攻隊を指揮して、沖縄方面の敵艦船を直接攻撃することであった。当時沖縄及び徳之島方面の各飛行場に対する敵機の活動は次第に激しくなり、沖縄飛行場への特攻隊の推進は、事実困難となったので、私は師団長の命令に基づき、新田原飛行場にある特攻機を指揮することになった。

新田原の航空特攻戦闘準備

（省略）

新田原飛行場

航空特攻隊員の戦闘の状況

(1)第1次攻撃

既に3月下旬後半、沖縄本島は多数の敵艦船に包まれ、私は4月1日から特攻攻撃を開始するように準備を進めていた。果然、同日午前、嘉手納側西海岸に敵の上陸が開始され、いよいよ誠第39飛行隊（1式戦6機）で、その日の薄暮攻撃を決行した。本攻撃の参加者は次のとおりである。

隊長(少)宮永　卓　(少)面田定男

（少）吉本勝吉　（軍）内村重二
（軍）悦田　存　（伍）松岡己義

12時までに飛行機の整備とその他の出動準備を完了し、14時30分命令下達のため戦闘指揮所に集合を命じた。特攻隊員たちは、戦闘指揮所に集合する前の寸暇を利用して、飛行場東側の丘陵地帯を散策して、時あたかも満開中の山つつじを鑑賞したらしく、手に手に山つつじの小枝を持って14時20分や前戦闘指揮所に集合した。出撃直前に、この心の余裕を見せたことは頼母しい限りであった。

14時30分命令下達と指揮官として訓示、隊長宮本少尉の一同を代表しての宣誓を終わる。14時55分天皇陛下の万歳を三唱し恩賜の酒と煙草を拝受した。

15時より約一時間夕食を喫した。地方団体より寄贈された折詰（赤飯、鯛、海老の立派なもの）を供した。机の上は彼らがそれぞれ持参した山つつじをもって立派に飾り立てた。談笑相飛び、和やかな雰囲気のうちに彼らの最後の食事を終わった。よく食べ残飯は無かった。ここにも彼らの大悟徹底した心境がうかがわれたのであった。

16時飛行機整置線近くに集合して、飛行機搭乗の申告、私との最後の握手を交わした後、それぞれ小走りに飛行機に乗り移った。手に手に山つつじを持ち、紅顔をほころばせつゝ、地上に見送る人と歓呼の応酬が続く。始動開始ややや前特攻隊員たちは手にした山つつじを一斉に見送る人垣の方へ高く投げた「散華の意」を花に托したのであろう。

16時15分始動開始、16 20分出発の合図に逐次秩序正しく出発線を発して沈着冷静且つ確実なる操縦で離陸上昇し、編隊を整えつつ、機首を南へ向け、翼を振って見送る人に最後の別れを告げて、特攻の空へと消えて行った。素晴らしい出撃の模様であった。地上で見送るものは脱帽拝神の礼をもって、彼らの特攻の成功と冥福を祈るのであった。

19時20分宮本、面田両編隊長より相前後して「攻撃開始」の信号を戦闘指揮所の対空無線に送って来た。19時25分ころより沖縄の地上勤務部隊よりの戦果報告が対空無線に入って来た。5機攻撃、轟沈艦種不明1、撃沈艦種不明1、撃破炎上艦種不明1、火柱2と。

内村軍曹は出発前の命令で戦果確認機となり、任務終了後那覇飛行場に着陸し、所要の報告を新田原に無線で報告の後、8FD派遣の神参謀の指揮に入った。内村軍曹は命令の通り行動し、後は特攻機として敵艦船を攻撃して船種不明1隻を撃沈した。従って第一次攻撃における誠39飛行隊の戦果は6機全機攻撃、うち有効4機、火柱2機となり、相当の成果を納めたのであった。特に内村軍曹の沈着冷静な行動と確実なる報告及び責任観念おう盛なことは賞賛に価するものであった。

(2)第2次攻撃

4月3日敵の上陸点附近の敵艦船を攻撃するに決し、誠第32飛行隊（軍偵6機）に出撃を命じた。この攻撃参加者は次のとおりであった。

隊長（少）結城尚弼　（少）小林　勇
（軍）時枝　宏　（伍）古屋五朗
（伍）佐藤英実　（伍）佐藤　正

出撃前及び出撃時の状況は、第1次攻撃の場合に近似している。

15時30分新田原飛行場を出発特攻に出撃した結城少尉は、部下編隊を目標附近まで誘導した後、一たん那覇飛行場に引返して着陸し、これまでの部下の全機が攻撃を開始するまでの経過を新田原に報告した後、直ちに引返して特攻攻撃をした。誠第32飛行隊には誘導機を指定しなかったのであるが、結城少尉は独断これを完遂し、指揮官のじ後の戦闘指導に資せしめたもので、その指揮官を思う心情に至っては感嘆の外なく、賞賛すべきものであった。

18時30分より沖縄地上勤務部隊よりの戦果報告が対空無線所に入って来た。それは轟沈戦艦2隻、撃破巡洋艦1隻、撃破炎上艦種不明1隻、火柱2であって、第1次に次いで相当の好戦果を収めたのであった。

(3)第3次攻撃

4月6日、6FA、5FA等の総攻撃参加の命を受け、新田原に在る残りの全機をもって之に参加した。すなわち誠第36飛行隊（直協10機）誠第37飛行隊（直協9機）誠第38飛行隊（直協8機）の計27機に出動を命じた、この日の参加者は次のとおりであった。

誠第36飛行隊（長）（少）住田乾太郎
片山少尉、北村少尉、高島少尉
小川曹長、森曹長、細木伍長
貴志伍長、岡部伍長、峯伍長。

誠第37飛行隊（長）（少）小林敏男
柏木少尉、佐々木少尉、藤沢軍曹
小屋軍曹、玉野軍曹、赤峰伍長
百瀬伍長、入江伍長

誠第38飛行隊（長）（少）小野生三
蕎麦田少尉、喜浦少尉、高橋曹長
水畑軍曹、石川軍曹、松井伍長
原田伍長

戦果確認機、木下少尉（1式戦）

出動前及び出動の状況は、第1次、第2次の場合とほとんど同様であった。出動機は14時20分より15時にわたり各隊それぞれ3編隊となって特攻に

出撃した。誠第38飛行隊の原田伍長は、途中、沖永良部島上空で故障を生じ、同島に不時着大破した。その他の全機26機は攻撃を行なった。

16時15分ころより相次いで沖縄地上勤務部隊の戦果報告が戦闘指揮所の対空無線に入って来た。それは轟沈大型輸送船1隻、轟沈大型輸送船4隻、撃沈艦種不明2隻、撃破大型輸送船4隻、撃破炎上巡洋艦3隻、大型輸送船1隻、駆逐艦1隻、艦種不明4隻、火柱5（木下少尉は7）であって、前2回の戦果に次いで相当良好なる戦果を収めたのであった。

戦果確認に任じた木下少尉は、長時間にわたり詳細に戦果を確認し、新田原に帰還中、燃料不足して喜界島に不時着大破したので、直ちに電話により前記と全く同様の報告を新田原戦闘指揮所に在る私に報告して来た。同少尉の責任観念のおう盛なることは賞賛に価するものがあった。

(4)総合戦果

以上で新田原からの8FD特攻戦闘は終了し、九州方面今後の特攻作戦は6FAの担任であった。4月1～6日、私の指揮した3次攻撃の総合戦果は次のとおりである。出動機数39機、攻撃実施機数38機、有効攻撃機数27機（轟沈4、撃沈9、撃破14）成功率70%。

知覧のこと

永崎笙子
（知覧高女なでしこ会・旧姓前田）

知覧高女なでしこ会編の「知覧特攻基地」という書物から、同会の御了承を得て既に三回ばかり転載させてもらった。これからも少しづつ特に感銘深い個所を紹介したいと思うが、今回は靖国神社社報「やすくに」の8年10月号に載った標題の記事を、神社並びに投稿者の了解得て転載する。なお永崎さん（旧姓前田）は「知覧特攻基地」の編集代表である。

昭和二十年四月十二日、第二次総攻撃の日でした。朝食の後片付けも終え、食堂と隣り合った控え室にいた私たちの所へ、第六十九振武隊隊長の池田亨少尉がお見えになりました。

「兵舎までだれかきてほしい」ということでした。入口近くにいた私が、隊長さんに従いました。兵舎にはいった瞬間はっとしました。朗らかで明るかったいつもの隊員の方々と違っていたからです。きりっと鉢巻をされて軍刀片手の方もいらっしゃいました。近迫した様子に身のすくむ思いがいたしました。

兵舎の床に大きな白紙がひろげられていました。中腰になって、筆で何かを書いている隊員もいました。中心の日の丸は血で書いたものでした。それがわかると足ががたがたと震えました。私は傍に立ち、直立不動で最後の方が書き終えるのを待ちました。

隊長さんは「これを報道関係者のいる兵舎に届けてほしい」と差しだされました。受けとった瞬間、生臭い血の臭いと墨汁の匂いが鼻をつきました。

"破れないように"と寄せ書を掲げるようにして持ち、報道関係者のいる兵舎まで登って行きました。

そこにいた記者に「第六十九振武隊員の寄せ書です」と手渡し、もと来た坂道を帰りました。隊長さんに報告すると「もう使うこともないから」とみんなでさっきまで楽しんでいらした小型のトランプと、使いかけの化粧石けんをくださいました。石けんは当時はたいへんな貴重品でした。

その二日前のことです。近くの霜出小学校に全員で慰問団の舞踊を観に行きました。途中甘藍（キャベツ）畑がありました。隊長さんはその葉に手をそっと触れられ「この甘藍は巻くだろうか」と心配そうにつぶやきました。そんな心優しい二十一歳の隊長さんでした。その甘藍畑は今も昔のまま、野菜畑になっています。

甘藍の巻くまで人の生きられず　笙子

その日も五時半ごろ帰り支度を始めていました。一人の少尉が私たちの控え室を訪ねてきました。

「これでマフラーを買ってきてもらえませんか」と衣料切符を差し出されました。私はそれを預り、翌朝ふだんより早く七時前に自宅を出て、上郡の鮫島呉服店に行き、番頭の山下正志さんに羽二重の布地五尺を分けてもらいました。町から一時間十五分くらいを一人で歩き兵舎でみんなと合流し、少尉に渡しました。「ありがとう、もう使わないから」と残った衣料切符をくださいました。それには、本島桂一と書いてありました。

本島少尉は寡黙な人でした。四月十

二日、地上滑走中に爆弾が落下して、その日の出撃に間に合われませんでした。その日以来、少尉はより無口になりました。

四月十四日、私たちが帰宅するための軍用トラックに便乗され、他の隊員の方々と外出されました。私が帰宅して黒い布のかけてある電燈の下で、夕食のためのお膳を出しているときでした。コツコツと石段をのぼってくる靴音がきこえてきました。

「こんばんわ」と、ガラス戸の向こうに立たれたのは本島少尉でした。一瞬はっとしました。軍機密のため、祖父には奉仕の内容をいっさい知らせてありませんでした。でも嘘をつくわけにもいきませんので「特攻隊の本島少尉さんです」と言いました。祖父は真正面から顔を見られず「おう、おう、むごかこっちゃ（むごいことだ）」と手を合わせ少尉を拝みました。

「これは、おじいさんに」と、ぶどう酒を一本くださいました。「これは笙子さんの学費に」と、巻いていた白絹のマフラーをとり、先の方十糎くらいを裂き、黒革の財布を逆さにして、全額を包み畳の上に置かれました。三十八円入っていたと後で祖父に聞かされました。

そして「校長先生のお宅へ行きたいのですが、どちらでしょうか」と言われました。灯火管制下の田舎道は真暗闇です。祖父は「利麿（小学二年生）と二人で案内してあげなさい」と提灯に火を入れてくれました。

知覧小学校の校門をすぎ、だらだら坂をのぼると、校長住宅はすぐです。「あの家が校長先生のお宅です」と指さすと「どうもありがとう」と玄関への坂をのぼって行かれました。奥様の「どうぞ、おあがりください。どうぞ」という一段高い声に安心して、弟と元の道を引き返しました。

そのとき、知覧高女に二百円を寄付され、黒革の財布は形見として、宇都校長先生に渡されたことを、戦後の授業の中で何回かおききしました。

翌日のことです。森要子さんと軍用道路を歩いているとき、物音がしました。二人でその方へ走って行きました。その時です。前方の菜の花畑の中から立ち上られた隊員がありました。本島少尉でした。はにかんだような、きまり悪そうなお顔で片手を押さえていました。瞬間、何をなさっているのか事情がつかめませんでした。

あの日から十一年経って、長野県のご自宅をお訪ねしたとき、お父様に遺書を見せていただきました。その中の、「至誠　本島」は血書でした。あのとき、少尉が手を押さえておられた意味が分りました。血書をされていたのでした。

あのころ、少尉が誘道路近くの山で手折った椿や山つつじも、菜の花もあれから五十年かわることなくいまも咲いています。

明日志れぬ命野菊に静かなる　桂一

岡安明少尉は、埼玉県のご出身です。卒業後は満州へ渡り、教職の道を選ばれたとのことでした。間もなく戦車隊にはいられ、転科して航空兵となって特攻隊に任命されました。

素朴なお人柄は、第六十九振武隊の隊員の気持ちを和ませたり、周りの人を明るくしている特異な方でした。出撃命令のおりたその日の夕方です。四通の手紙を私に託されました。その場で私の住所を聞かれ「前田勇四郎方」としてご自身のお名前を書きこまれました。それを預かり、当時木口といっていた手製の手さげ袋の底にしのばせて持ち帰り翌朝、知覧郵便局のポストに投函しました。

出撃の前夜は、食堂で壮行会がありました。隊長さんの発案で五時半までの予定が、特別に九時まで時間が延長されました。お酒がはいり、みなさんで軍歌を唄ったりして賑やかに過ごされました。

私たちも遅くなったので、特別に将校バスで町まで送ってくださることになりました。先生方の後につづいて私たちが乗り込み、扉が閉まろうとしたときでした。突然、扉の前に飛行服姿の隊員が立ちふさがりました。

「みなさん、さようなら」大きな声で別れのあいさつをされました。岡安少尉でした。私は森さんと二人、バスの中で抱き合って泣きました。明日の出撃を知っていたからです。

岡安少尉が翌朝、一人徒歩で戦闘指揮所の方へ行かれるのを見かけました。道路の下の田圃で、出撃隊員に贈るれんげ草の花の首飾りを作っていた私たちに向って「いろいろお世話になったね」と言って階級章をはずし投げられました。そのまま兵舎へは戻ってこられませんでした。

最後に岡安少尉を拝見したのは、隊長機に続く二番機として別れの急降下をされたときでした。翼を三回振り、開聞岳を左に編隊をくみ飛び去っていかれました。岡安機は再び、知覧基地に戻ってきませんでした。

出撃や特攻日和蟬の声　明

昭和三十年九月、知覧町では特攻隊員の崇高な精神を顕彰するため、知覧

飛行場跡に特攻平和観音堂を建てました。内部に安置されている観音像は、法隆寺の秘仏、夢ちがい観音にちなんだもので、体内に特攻戦没者、一〇三五柱の芳名を記した巻物が納められています。

昭和四十九年五月三日、全国からの浄財を仰ぎ、特攻銅像〝とこしえに〟が建立されました。同五十年には、隊員の遺徳をしのんで遺品館が建てられました。現在は、特攻平和会館として、隊員の遺影、遺書、遺稿などが展示され毎年六十万人が訪れています。

平和公園に続く参道には、全国の有志が寄贈された八百二十基の石灯籠も建立されています。

今年も五月三日、第四十二回知覧特攻基地戦没者慰霊祭が特攻観音堂前でとり行われました。遠くは韓国、国内各地からご遺族百六十名を含む千二百名が列席されました。出席者全員、若くして戦死された特攻隊員を悼む気持ちを新たにしました。

このあと、例年のようにご遺族、同期生の方々、関係者の皆様を三角兵舎跡にご案内しました。兵舎跡の碑に全員が献花と焼香をしました。その後、元特攻隊員だった方が、当時の兵舎の配置など細かな説明をされました。なでしこ会員も二十一名が参列し、会員の一人菊永トミ子が、特攻隊員をしのんで献吟をしました。

当時、田舎の素朴な女学校三年生にとって、特攻隊の皆様はかなりの年輩者に見えましたし、死を目前にされた神様のような存在でした。そのため、すべてが新鮮なものとして心に焼きついています。今年もまた、さまざまな感慨をもってあの地に立ちました。

毎年、兵舎跡を訪ねるとあのときのことが昨日の出来事のようによみがえり、たぎるような平和への願いがこみあげてきます。

私たちは毎年、桜の季節に靖国神社で催される、特攻隊合同慰霊祭、五月三日の知覧特攻基地戦没者慰霊祭に参列しています。そして、日本を守る一心で飛び立って征った特攻隊員の御冥福を祈っています。

特攻隊の皆様の三十三回忌に、私たち〝なでしこ会〟は平和の願いをこめて「知覧特攻基地」を出版しました。その後いろいろな史実などから多少の改訂をし今夏『群青―知覧特攻基地より』を出しました。

天は何をもって私たちにこの運命を課したのか、私たちがあの時代に知覧にいなかったら、これらすべての人生が変わっていたかも知れない、と思うことがよくあります。

新改築成った
川南護国神社の例祭

嘗て陸軍空挺部隊の基地だった宮崎県児湯郡川南町の護国神社には、同町出身六三四柱の戦死のほか、一万有余の空挺部隊戦者もお祀りしてある。このことの由来については、境内にある碑の文面に刻んであり、この会報26号でも紹介した。ところでこの社の本殿は昭和24年に建てたもので、屋根が鉄板だった為腐蝕による雨漏り甚しかった。そこで今般本殿を新築し拝殿の屋根を葺きかえ面目を一新したが、空挺部隊の戦友会も応分の負担をした。

例年11月23日には奉賛会長である町長が祭主となり、町を挙げての例祭を行っている。生き残りの戦友も追々少くなり、本年は全国から参集した者は約五〇名だったが、後継者である自衛隊空挺隊員が十数名参加した。

この祭典は町が主催するので永久に続くであろうし、我々が死に絶えても自衛隊空挺隊員は参加するであろう。

町では資料館の建設を計画しており空挺関係の資料が主体となることは言うまでもない。我々は全面的に協力する所存である。

陸軍海上挺進戦隊慰霊祭

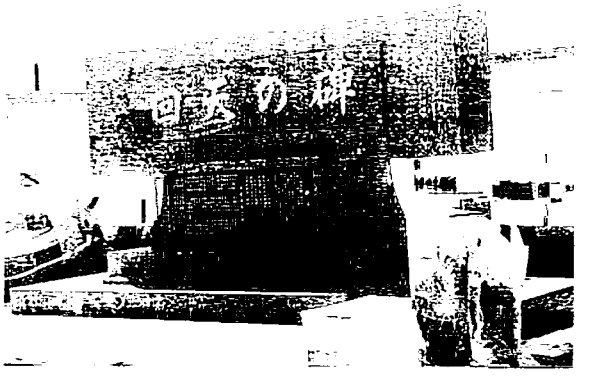
菊香る、11月10日（日）晴　陸軍海上挺進戦隊（若潮会）の第三十回慰霊祭が靖國神社で行なわれた。15日の七五三前の休日とあって、拝殿に特別に造られた受付には、着かざった親子連れの列が出来、にぎやかである。

受付けを終え、参集殿に集った若潮会の会員、それに遺族の皆様は定刻11時丁度、御手洗にて、口、手を清め拝殿へ「君が代」のおごそかに流れる中、修祓式、お祓いを受ける。11時10分廻廊を渡って本殿へ、「山の幸」の荘重なる楽が奏ぜられる中、御神酒、海、山の幸が神前に供えられる。その後、神官による祝詞、挺進戦隊の活躍が奏上される。次いで浜野若潮会関東支部長の祭文、遺族、戦隊、若潮会代表等五名の玉串奉奠、一同代表にあわせての二礼二拍手一礼、黙禱をして退出する。その後場所を九段会館に移して總会、懇親会を行った。　若潮会　深野

昨年11月10日に大津島で行はれた回天及び搭載潜水艦戦没者追悼式の記事は、校了後に到着したので次号に掲載します。

光「回天」の碑　除幕・追悼式

山田　達雄



平成8年10月10日、光市に於て光「回天」の碑の除幕式と追悼式が挙行された。

回天の訓練基地は大津島・光・平生（山口県）と大神（大分県）の四ヶ所にあった。このうち大津島には記念館・平生・大神には記念碑が建っており、光だけが何もなかった。

このたび光甲飛会が中心となり光廠会等海軍関係者等により「光回天の碑建立の会」が設立され、募金・設立の運動を展開、回天基地跡の光井川河口の元クレーン跡地に5㍍×6㍍の場所を山口県周南港湾管理事務所より光市が借り受け、そこに「回天」の碑が建立され、10月10日午後1時30分より碑の除幕および追悼式が挙行された。

当日は久し振りに天気晴朗となり、室積・娥眉山・祝島等往時の訓練海面も見渡せ、亡き戦友を偲ぶのに絶好の一日であった。

開会の辞のあと、光市長・光「回天」の会会長・ご遺族代表・全国回天会代表・同事務局長・光「回天」ゆかりの人の6人により除幕され「回天の碑」と大書された幅3㍍高さ2㍍の巨大な碑が姿を現した。石材は回天発祥の地大津島産の御影石である。

ついで黙禱・経過報告・式辞・祝辞来賓紹介・祝電披露・謝辞があり、参列者一同献花をして閉会となった。

閉会後参列者は総員防波堤の上から菊の花を海中に投下して征きて還らぬ勇士を偲んですべての行事を終了した。

参列者は、ご遺族9名・搭乗員や基地関係者・光工廠関係者等60数名・来賓は光市長ほか14名・建立の会役員24名その他一般参列者多数で合計350余名であった。

碑文は次のとおりである

碑　文

太平洋戦争末期の昭和十九年十一月二十五日　人間魚雷「回天」光基地が光市のこの地に開設された

「回天」とは海中を潜り敵艦に体当りする一人乗りの人間魚雷のことである

祖国　日本を守るため　潜水艦に搭載されて南太平洋に出撃した

「回天」に搭乗した若者は　再び生きて　この地に還ることはなかった

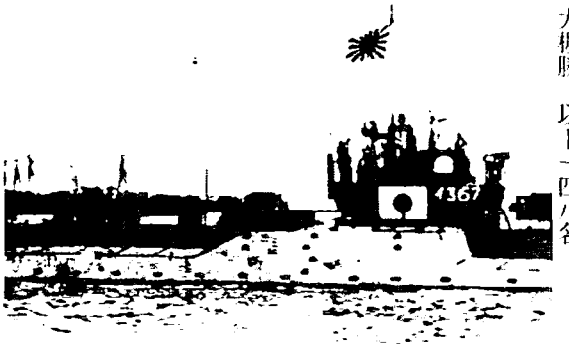
わたしたちは祈る
あなたがたの御魂が
ふるさと光に安らぐことを
わたしたちは誓う
未来の子どもたちへ
平和の志を、確かに伝えることを

光基地戦没者

岡山至　斉藤達雄　新野守夫　市川尊
継　田辺晋　田中金之助　田中一郎
岩崎静也　猪熊房藏　浦佐登一　釜野
義則　赤近忠三　熊田孝一　梅下政男
伊東祐之　菅原今朝松　坂本茂　吉
田洸　亀田武雄　高沢喜一郎　樽井辰
雄　森正夫　藤原昇　横尾喜三郎　荒
木七五三一　池淵信夫　富永一喜　寺
西亨　久家稔　河田直好　八木悌二
柳谷秀正　島田昌　安部英雄　小知創
一　矢崎美仁　海老原清三郎　北村十
二郎　三好守　松田光雄　阿部福平
阪本直道　柿崎實　恵美須忠吉　和田
稔　古川七郎　成瀬謙治　山口重雄
上西徳英　光市出身　前田肇　佐野元
八木寛　小林富三雄　河合不死男
仁科関夫　金井行雄　堀田耕之祐

伊号第三七〇潜水艦
藤川進　以下七九名

伊号第三六一潜水艦
松浦正治　以下七六名

伊号第一六五潜水艦
大野保四　以下一〇四名

第十八号輸送艦
白龍隊　一一四名
大槻勝　以下一四八名